☆ 帝国主義 ― 社会帝国主義を世界革命戦争で打倒し、世界プロ独を樹立せよ！
☆ 世界同時革命勝利！
☆ 世界党 ― 世界赤軍 ― 世界革命戦線建設！

赤軍

9号
（復刊号）
1974年9月4日
特価150円

共産主義者同盟
赤軍派日本委員会
宣伝局

革命戦争―赤軍に結集せよ！

小ブル日和見主義の粉砕・小ブル急進主義の止揚とプロレタリア革命派赤軍への大道

赤軍再建宣言

一九七四・七・一五　共産主義者同盟赤軍派日本委員会

『赤軍』が革命的に再建された。世界革命戦争の日本―世界を貫く革命主体―革命軍―赤軍が再建されたのだ。同盟赤軍派結党以来五年、連合赤軍結成以来三年、そして連合赤軍敗北以降二年有余の、その全てを背負い、継承すべき組織として我々は我々の全勢力を注ぐのである。72年同盟敗北以降の同盟に巣喰った種々の解党主義―経済主義・サークル主義そして無政府主義、それら一切との烈火の如き党内―分派闘争の中で、とりわけ同盟内最右派であり、しかし最大多数であった、いわゆる「臨総派（臨時総会開催グループ）」一分派を名実共に解体させ、それと同時一体としての同盟内全分派との闘争―解体―再編そして結合を通じて、我々は世界革命戦争を闘い抜く、プロ独―革命戦争―プロレタリア革命派の党としての我が組織の再建を勝ち取ったのである。

我々は、この事を全世界人民全同志、とりわけ今日も苦闘の中で日本に於ける社会主義革命戦争を闘い抜かんとしている、そしてその闘いの日々を続けている無数の戦士達に宣言する。

赤軍が、革命の軍隊の中核が、再建されたのである。我々はいかに少数であろうとも、プロ独―革命戦争―プロレタリア革命派への道を闘い取る革命主体として武装した党として自己を堅持し続けるし、党としての路線的正当性を、将に実践たる日本に於ける革命戦争の闘いの中で検証し、深め、今日獲得されている綱領的基盤を、より緻密な実体として発展させるし、そしてなによりも、帝国主義の侵略・抑圧・反革命―差別・分断支配攻撃―破防法体制～なし崩しファシズム体制の中で、革命軍―赤軍を維持し発展させ全人民の武装・革命軍建設の任務を、徹底した敵との闘争を、我々が「生存」し続ける事でもって貫徹するであろう。このプロ独―革命戦争を闘う党の建設、一切の大衆闘争―反帝闘争―民主主義闘争を、その先頭で闘いかつ、その内部に於いて政治闘争―権力闘争としての世界革命戦争―世界プロ独の共産主義運動の内実を確立する地下労働者秘密細胞―赤軍細胞の建設、すなわち武装した職革の党の建設、この闘いを革命戦争―その端初としての遊撃戦―ゲリラの闘いの中で貫徹する事こそが、我が同盟の全歴史の継承と止揚であり、かつ生きた総括である。

我々は我が同盟の敗北、そしてそれ以降二年有余のより根底的敗北を今日明確に止揚・克服するその第一歩に着手したのだ。この二年有余の痛苦の敗北に比して、我々のこの出発がいかに遅きに失したものであれ、我々はこの負債を、今日すでに開始されている革命戦争の組織的闘争の中で、確実に血肉化してゆくであろう。

全国―全世界の同志、兄弟達！　我が同胞達！　我が赤軍は帝国主義打倒―プロ独樹立の闘いを最后まで闘い抜く。我々は革命戦争の中で発展・成長する。全世界の革命的兄弟達―友人達と戦場の中で結合し団結を深める。

同志、兄弟達！　同胞達！　共に世界革命戦争の勝利へ向け闘い抜こうではないか。戦争の中での我々の友情と団結を確認しようではないか。相互を打ち鍛える党内―分派―党派闘争とは、この戦場の中での我々の団結でしかない。

同志、兄弟達！　全戦線で攻撃せよ！　プロレタリアートの武装力、団結力を敵ブルジョアジーに知らしめよ！　全戦線を武装せよ！　全戦線に革命軍事組織を建設せよ！　全ゆるものを武器とし、敵に確実なる打撃を与えよ！

同志、兄弟達！　全世界の革命的同志と結合し、世界革命戦争を日本に於いて闘い抜け！　侵略・抑圧・反革命―差別・分断支配攻撃を粉砕し革命戦争を闘い抜け！　革命戦争の戦場の中で、帝国主義支配下の奥深く、我が赤軍は同志、兄弟達と確実に結合する！　戦う同志、兄弟達とは必ず確実に地下に於いて我々赤軍は出会い、結合する！

全ての同志、兄弟達！　我が同胞達！　武装を堅持し赤軍に結集せよ！

共産主義者同盟赤軍派（日本委員会）に結集せよ！

世界革命戦争勝利！

世界党―世界赤軍―世界革命戦線建設！

（7・15は再度記念すべき日となった。第一回目は一九二年七月十五日の日本共産党（第三インターナショナル日本支部）結成の日であり、第二回目は一九七一年七月十五日の革命軍「赤軍」結成の日である）

1　プロ独―革命戦争の勝利への前進

資本主義から社会主義への過渡期・帝国主義の最終段階としての現代帝国主義の打倒と世界プロレタリア独裁樹立―社会主義建設、この階級闘争の現地平に於ける戦いは、世界革命戦争として組織され、その指導部―前衛党は世界党として組織されねばならない。

現在に於ける政治闘争―権力闘争の環は、帝国主義打倒・社会帝国主義打倒の反帝・反社帝・社会主義革命戦争の展開であり、その単一組織化を軸とする全世界階級闘争の統合であり、いわゆる後進国・労働者国家および帝国主義国内に於ける三ブロック階級闘争の世界革命戦争としての有機的結合であり、その地平に於いて第一世界（米帝・社帝）第二世界（欧州帝・日帝）を包囲・内外結合して打ち破るいわゆる第三世界プロレタリアート・人民の闘い、すなわち後進国民族解放社会主義革命戦争を先頭に労働者国家内プロ独―社会主義革命戦争の統一的結合―世界党―世界赤軍によって領導されその統一戦線―過渡的権力機構としてプロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争が所有を巡り存在する事を意味する。この事争の展開、そしてその環はまさしく帝国主義本国内プロ独―革命戦争の闘いの勝利的前進とその陣型たる革命党―革命軍―赤軍の帝国主義内部での建設である。世界プロ独―世界革命戦争勝利に向けた帝国主義国内に於ける階級闘争―政治闘争の環すなわち権力闘争は、資本主義の最終段階たる帝国主義、そのもっとも死滅を現実のものとしつつある現代帝国主義―強大独占集中集積の国家独占資本主義の体制下にあっては、資本主義の不可避の発展としての社会主義への転化を自ら組織する唯一の革命―社会主義革命以外あり得ず、その勝利は世界的同質構造を世界市場の共同分割として維持している帝国主義世界体制の全世界的局面での粉砕打倒たる世界社会主義革命の勝利以外あり得ず、その権力基盤は世界プロレタリアート独裁に於いての全世界的な生産手段のプロレタリア専有と私的所有の廃絶を闘い取る闘争―社会主義建設運動の中での、絶対的権力をプロレタリアートが維持する事を通じての、不断に発生し復活を計る残存したブルジョアジーなきブルジョア体制との闘争であり、その意味に於いて生産関係―交換関係を貫く中で、とりわけ流通と分配の過程で不断に復活する恐れのある小所有―私的所有―ブルジョアジーとの闘いであり、それは将にプロ独―社会主義建設の闘いの中に於いても明確にプロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争が所有を巡り存在する事を意味する。この事を否定する今日の反スタ―トロツキズム、あるいは小ブル日和見主義・経済主義者達は、階級関係を階級闘争の見地―権力闘争の立場すなわち権力と生産関係をどの階級どの階級思想が掌握しているのか、その事から規定できず、いわゆる経済関係の立場を綱領的立場に於いてもこの間、増々鮮明化させているのである。また他方、プロ独権力―社会主義革命政府を統一戦線政府―労農同盟政府として提出するまったく驚くべき立場を取る部分が、臨総派分派内のあるフラクに見られる。この立場こそ当面の我々が樹立すべき権力をプロレタリアートの独裁として規定する事に本質的恐怖と嫌悪を持ち、口先でプロ独―社会主義革命―世界革命戦争を語りつつも、その内実をいわゆる民主主義政府としての労農政府、その内部に小ブル・小所有を認め、民族ブルさえもその存在を認める人民民主主義政府としてしかその位置を見い出せず、本来世界社会主義革命―世界プロ独への闘い―世界革命戦争の中で、過渡的に取られるべき世界社会主義革命戦争の闘争機関としての統一戦線政府の樹立を社会主義政府とし、社会主義革命を民主主義革命に解消するまったくの小ブル民主主義派としてその本質を有する傾向である。かつての臨総派分派のイデオローグによって形成されるこのフラクが、いかにプロ独派を名のろうとも、その本質たる小ブル穏健主義、民主主義派の本質を結果としては隠しきれない証拠である。

我々の階級闘争の最終の目標は、私的所有の廃絶・生産手段の社会的共有、「能力に応じた労働、必要に応じた分配」の共産主義社会の実現であり、その環としてのプロレタリアートの経済的従属―賃金奴隷制の廃絶、すなわちプロレタリアートの経済的解放、これが第一の任務である。この共産主義と資本主義の過渡期にあって、共産主義の低い次元社会主義―「能力に応じた労働、労働に応じた分配」も含め、長期↙

↙ロレタリア独裁樹立―社会主義建設、この階級闘争の現地平に於ける戦いは、世界革命戦争として組織され、その指導部―前衛党は世界党として組織されねばならない。

現在に於ける政治闘争―権力闘争の環は、帝国主義打倒・社会帝国主義打倒の反帝・反社帝・社会主義革命戦争の展開であり、その単一組織化を軸とする全世界階級闘争の統合であり、いわゆる後進国・労働者国家および帝国主義国内に於ける三ブロック階級闘争の世界革命戦争としての有機的結合であり、その地平に於いて第一世界（米帝・社帝）第二世界（欧州帝・日帝）を包囲・内外結合して打ち破るいわゆる第三世界プロレタリアート・人民の闘い、すなわち後進国民族解放社会主義革命戦争を先頭に労働者国家内プロ独―社会主義革命戦争の統一的結合―世界党―世界赤軍によって領導されその統一戦線―過渡的権力機構としてプロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争が所有を巡り存在する事を意味する。この事を否定する今日の反スタ―トロツキズム、あるいは小ブル日和見主義・経済主義者達は、階級関係を階級闘争の見地―権力闘争の立場すなわち権力と生産関係をどの階級どの階級思想が掌握しているのか、その事から規定できず、いわゆる経済関係の立場を綱領的立場に於いてもこの間、増々鮮明化させているのである。また他方、プロ独権力―社会主義革命政府を統一戦線政府―労農同盟政府として提出するまったく驚くべき立場を取る部分が、臨総派分派内のあるフラクに見られる。この立場こそ当面の我々が樹立すべき権力をプロレタリアートの独裁として規定する事に本質的恐怖と嫌悪を持ち、口先でプロ独―社会主義革命―世界革命戦争を語りつつも、その内実をいわゆる民主主義政府としての労農政府、その内部に小ブル・小所有を認め、民族ブルさえもその存在を認める人民民主主義政府としてしかその位置を見い出せず、本来世界社会主義革命―世界プロ独への闘い―世界革命戦争の中で、過渡的に取られるべき世界社会主義革命戦争の闘争機関としての統一戦線政府の樹立を社会主義政府とし、社会主義革命を民主主義革命に解消するまったくの小ブル民主主義派としてその本質を有する傾向である。かつての臨総派分派のイデオローグによって形成されるこのフラクが、いかにプロ独派を名のろうとも、その本質たる小ブル穏健主義、民主主義派の本質を結果としては隠しきれない証拠である。

我々の階級闘争の最終の目標は、私的所有の廃絶・生産手段の社会的共有、「能力に応じた労働、必要に応じた分配」の共産主義社会の実現であり、その環としてのプロレタリアートの経済的従属―賃金奴隷制の廃絶、すなわちプロレタリアートの経済的解放、これが第一の任務である。この共産主義と資本主義の過渡期にあって、共産主義の低い次元社会主義―「能力に応じた労働、労働に応じた分配」も含め、長期↙

↙の持続する階級闘争の時代を迎えねばならず、その環はプロレタリアート独裁＝世界プロ独の時代である。プロレタリアートの国家＝プロ独政府は、その下に一切の生産手段を管理掌握し、国家所有として労働者管理を実現しつつ、小所有を除々にではあれこのプロレタリア国家所有に従属結合させ、農業の工業化としての集団制＝集中管理を他方の労働者管理と結合させ、農民のプロ化を現実化させつつ、政治権力をプロレタリアートが握り続ける事を通して政治・社会革命の発展として、全社会＝機構での社会主義建設闘争を前進させ、その闘争の中で、復活するブルジョア制と徹底して闘う事、このプロ独の実現こそ、今日の一切の階級闘争の第一の目標であり、全世界プロレタリアートの共通の目標であり、政治闘争の環である。いわゆる生産関係の矛盾の結果として表現される種々の経済闘争、社会闘争＝民主主義諸闘争は、このプロ独樹立に向けた闘争＝政治闘争として発展止揚されない限り、一切の階級的解放はあり得ないのである。今日の資本主義体制が不断に生み出す階級矛盾の結果に対する、プロレタリアート人民の反抗・憤激の増大としてある、この一切の民主主義闘争＝自然発生的即時的プロレタリアート人民の闘争は、その階級矛盾の根源としての生産関係を巡る闘い＝経済的解放を勝ち取る闘いに勝利しない限り、その真の解放はあり得ないのである。この共産主義＝プロ独への闘いの道を、労働闘争・大衆闘争の内部で、そのプロレタリアート人民の呻吟・苦悩・悲惨さを自らのものとしつつ、その闘争を最先頭で闘いつつそれを指導し、プロレタリアートが資本主義に於ける唯一の拡大し発展しその階級闘争の勝利者である、プロレタリアート自身の階級的本質を、すなわち、資本主義の発展そのものが生み出す大工場制・共同労働を媒介にしての単一階級としてのプロレタリアートの、他の一切の諸階級、諸階層の没落に対して自己を増々拡大させ、結合させそして単一の階級として団結させるその基盤を、プロレタリアートの階級的の本質としてプロレタリアートに指し示し、その実体を将に対自化した階級としてプロレタリアートを組織する事、いわゆる即時的、自然発生的な経済闘争＝交換関係を巡る闘いのその外部から、この目的意識的階級性を注ぎ込み、プロレタリアートを唯一の共産主義運動の実体として組織し止揚し発展させる事、この将にプロレタリアート運動の真の発展を指示す共産主義運動の実践者たる指導部として、プロレタリアートは自らを組織する独自政党＝革命党を建設しなければならない。そしてこの党は、ブルジョアジーとの闘いに於いて、そのブルジョアジーの権力維持を国家を巡る権力としてすなわち暴力装置としての国家を軸に維持している事、その環に近代市民社会の権力統括者＝常備軍が存在する事、この資本主義の今日的存在は、帝国主義＝現代帝国主義体制の実体として、そのブルジョア権力維持を、侵略反革命体制として、将に戦争＝軍事体制として維持している事に於いて、このブルジョアジーとの闘いに勝利する党は、その党そのものが階級的政治的にそして軍事的にも武装しておかねばならない事を意味する。原則としての革命助産婦たる「暴力」は今日に於いては、より一「組織された暴力」そして党の武装・階級武装＝全人民の武装、および革命軍の建設として結論化されねばならない。この組織的実践は党を中央集権党として建設する事、職業的革命家の党である事はもとより、帝国主義侵略反革命＝ファシズム体制下でそれを打破する体制として非合法党地下体制であり、そして党の武装＝革命軍建設の根幹として軍事組織の党でなければならない事を意味する。

過渡期世界に於ける帝国主義本国内階級闘争の戦略的基軸・政治闘争＝権力闘争の環は従って、プロ独を世界プロ独として樹立する世界社会主義革命＝世界同時革命の世界革命戦争を闘い抜く中での勝利であり、その任務に一切の民主主義諸闘争を結合させる事であり、この戦略軸は帝国主義＝社会帝国主義打倒・第三世界革命戦争、とりわけ民族解放闘争との結合を通じた自国帝国主義打倒＝臨時革命政府樹立＝世界革命戦線政府樹立の革命戦争の闘いに勝利する事である。その陣型は世界党＝世界赤軍＝世界革命戦線であり、その党は非合法中央集権職革の党・秘密細胞の党・軍事組織の党である。プロ独樹立＝革命戦争勝利そして赤軍建設・軍事組織の党建設は今日の帝国主義国内プロ独派の戦略的基本任務である。そしてその組織的闘いは、建軍＝武装闘争＝戦術的遊撃戦・ゲリラ戦を端初とする長期持久消耗戦たる革命戦争を実践的に党が闘う中に於いてその組織性・政治性・指導性そして軍事性および党＝前衛としての一貫的・系統的指導部としての位置が確立されるのである。

[2]　侵略・抑圧・反革命＝差別分断支配攻撃との闘い

日帝の70年代中期の基本路線は「なし崩しファシズム体制」の完備確立にその軸があり侵略・抑圧・反革命＝差別分断支配攻撃をその政治戦略の環としている。60年代後半以降の帝国主義世界体制の政治・経済的矛盾破綻に規定されて、日帝は経済政策の軸であった高度経済成長政策の破綻として自己矛盾を表現しており、その矛盾をインフレ政策＝強収奪強蓄積としてプロレタリアートに矛盾転化せざるを得ず、自己経済ブロック＝侵略体制における政治軍事矛盾での不安定性は、米帝欧州帝のブロック圏決済での一定解決に対し、相当の困難さと自国内処理の不可避性としてその↘

↙現状があり、それ故より一層「円ブロック」確立、とりわけ朝鮮統治の要求と、他方国内矛盾処理の土台的確立＝インフレ政策下に於けるプロレタリアート内部及び下層人民あるいは民族・部落差別＝棄民化政策の要求が体現化されてくるのである。侵略と反革命の統一を国家統制体制として維持する環を、たとえば戦前に於ける「天皇ファシズム」体制＝皇民思想の如く確立し得ない今日に於ける日帝はその統治＝統合軸を社民＝人民戦線ラインをも包摂したニューディール型ファシズム体制＝議会制ファシズム体制としてその環を軍事・治安＝政治警察強化として、他方帝国主義労働運動の育成を通じての社民社帝勢力の社会排外主義＝差別分断体制の確立、その事での国内反革命分断体制の整備として完成させようとしている。かつての皇民統合＝天皇制排外主義をテコにしての民族＝国家主義の動員体制を今日にあっては、プロレタリアート人民内部での差別分断化＝差別反革命排外主義での国民統合としてそのファシズム体制の確立を追求しているのである。この下部構造に規定されるイデオロギー統治を軸に、日帝は明確にプロ独派の殲滅と国際プロレタリアート、とりわけ日帝を包囲する民族解放闘争＝労働者国家内プロ独運動との結合を全力量を用いて阻止しようとしている。ここにこそ、帝国主義の基本動向たる侵略・抑圧・反革命に結合して日帝に於ける差別分断支配攻撃の実体がある。その環はまぎれもなく朝鮮＝朝鮮革命（北部）労働者国家＝韓国反日反朴闘争↓（南部革命）＝在日朝鮮人解放闘争の三ラインの存在である。

日帝の再編軸は従って以下の五点に要約しうる。①軍事侵略反革命体制＝自衛隊機動隊増強　②行政権拡大＝自民独裁体制・小選挙区制　③破防法体制＝司法反動化・刑法改悪保安処分　④帝国主義労働運動＝民族部落差別を軸に社会排外主義の確立　⑤円ブロックの確立拡大＝南部朝鮮完全統治要求・台湾独立東南アジア反日闘争との対決。今日この基本戦略の不充分性の故に、国内矛盾＝プロへの矛盾転嫁のインフレ政策での延命があり、その内部での差別・分断支配の環としての下層プロ貧農障害者等への棄民化政策が存在している。日帝は70年代中期から後期にかけて対人民戦線派および対プロ独＝下層人民＝革命的国際勢力の二つの勢力の動向を注視しながら、①一挙的ファシズム体制への移行（小選挙区制・刑法改悪・靖国法案）②社会民主＝社民体制への中の帝国主義労働運動勢力の拡大の中での中間的延命　③人民戦線政府（社共）を、経済体制での独占維持を確約した中での延命の三つの選択を選ぼうとしている。そしてその決断の環が、国際階級闘争とわけ反日反米のアジア民族解放闘争の進展であり、また国内差別分断支配体制の整備状況と下層プロ下層人民貧農・在日中朝人民および部落大衆の動向また青年の状況であり、そして第三はいうまでもなく前二者の国内的統合環たるプロ独派の発展状況の、その三つの基本ラインの動向に規定されている。

従って、我々は今日の日帝内に於ける侵略・抑圧・反革命＝差別分断支配攻撃との闘いを、その最先頭で闘い抜くべく、指導し組織しなければならない。70年代中期とりわけ74年秋＝75年春に於けるこの闘いの環として、我々は次の戦線でその対決をなさねばならない。第一に「朝鮮」との結合である。北部朝鮮革命＝プロ独闘争と結合し、日帝打倒の国際的革命戦線の有機的確立を全ゆる形態でもって強化する事。南部朝鮮反日・反朴闘争＝南部革命と結合し、日帝の生命線たる南部朝鮮への侵略・反革命政策を暴露し打ち破る闘いを日帝内に於いても強化する事。そして在日朝鮮人民の革命的決起と朝鮮革命との結合および差別分断支配の環たる入管体制を打破し、日帝内プロ内部の社会民族排外主義を社民・社帝と徹底して闘い抜きつつ打破し、その闘いに下層プロ下層人民の解放闘争と結合した強固な革命戦線を確立する事。将に日帝にとっての生命線たる「朝鮮」は同時にそれ故日本プロレタリアート革命派にとっても生命線である。我々の国際主義と将に国境民族を越えた世界赤軍の戦線の確立はこの日＝朝人民の革命的団結＝反日革命戦争の展開の中でも確立されるであろう。そしてそれは今日具体的戦線として確立されつつある。第二に部落解放闘争との結合、とりわけ狭山差別裁判闘争での闘いを強化する事。この事は日本プロレタリアートが差別排外主義に屈服し、侵略・抑圧・反革命体制に動員されるか否かの分岐点であり、我々は全ゆる戦線で細胞指導の重要な環として全人民のこの闘争への結合を押し進めねばならず、それは単に日本の共産主義運動の自己批判にあるのではなくプロ独運動＝世界プロ独への闘いとして、共産主義運動としての部落解放闘争への結合その助力援助があり、そうであるが故に日本のプロレタリアートの階級性を確立する事。第三に「沖縄」の闘いの米・日共同反革命体制の環としての前線基地「沖縄」を侵略・反革命体制＝国際反革命体制を打ち破り米軍・自衛隊の基地を撤去する闘いは、アジア人民の反米抗日闘争との結合、および日本プロ独への闘いである。①小選挙区制　②刑法改悪　③靖国法案、この三法案は政治的ファシズム体制＝国際市場として、将に沖縄大衆の生活破壊と低賃金構造として表現されつつあるその現状への闘いは明確に経済闘争の範を超えるものとして存在する。そして沖縄大衆自身の解放闘争は差別分断支配との闘い、排外主義との闘いに於いて前二者と結合するものとしてその環がある。と同時に国家統治された中での解放闘争は棄民化政策への闘いとしてアイヌ同胞あるいは台湾独立解放闘争との有機的結合を有するし、この第一、第二、第三の闘いは、すなわち女性解放闘争、下層人民解放闘争、および障害者解放闘争のそれぞれの闘いと結合し、共産主義運動そのものの内実を要求、洗い直すものとして存在している。第四は三里塚闘争である。日帝の強収奪に対する闘い、軍事空港への闘いとして、共産主義運動としての部落解放闘争は、すでに農民闘争の範を超えた全人民的闘争としての位置を有しており、とりわけ71年闘争での新たな局面は遊撃的人民戦争としている。今秋期に於ける鉄塔撤去への闘争はこれらの闘いのひとつの頂点としてあるのであり、60年代後半の闘争を70年代に於いても維持し続けるこの闘いに新たなる政治闘争＝革命戦争陣型としての結合を確立する事は決定的意義を有する。そして第五にこの間現実化されつつある「諸反動法」への闘いである。①小選挙区制　②刑法改悪　③靖国法案、この三法案は政治的ファシズム体制としてその政治統治を計り、↙

革命軍事行動＝建軍＝革命戦争の組織問題

中央書記局

この五つの基本戦線で

かつ徹底した治安反革命抑圧体制を差別分断支配としての保安処分も含め確立化し、そのイデオロギー的基盤を再度の「皇民化」として確立しようとするものであり、この日帝の動向は現実的にすでに全ゆる局面で今日展開されており、それら諸政策への闘争の環としてもこの三者への闘いは確立化されねばならない。

我々は、我々自身を軍事組織＝軍事細胞として確認し、そしてその実践的存在、すなわち革命戦争の展開、その端初としての遊撃ゲリラ戦の確実で勝利的遂行を、我々の革命闘争の今日的主要側面として確認した。

我々の党建設は、私的所有の廃絶、生産手段の社会的共有を目的とし、その不可避の過渡とするプロレタリアート独裁＝世界プロ独を勝ち取る、その我々にとっての革命闘争の唯一の指導部、すなわち世界プロ独を勝利させうる革命戦略＝世界革命戦争をその先頭で闘い、その闘いに全労働者階級＝全人民を動員せしめる、その政治・軍事総司令部としての非合法中央集権党の建設、その闘いであり、それは将に戦争と戦争のたえまない持続性の中においてのみ達成されうる。我々の党細胞＝軍事細胞＝労働地下細胞は全労働者階級の全ゆる闘いの中にあって確実に、その党建設＝共産主義運動と大衆闘争の拡大・発展＝民主主義運動の二重の共産主義的任務を一貫した政治闘争として確立・拡大させるべく闘うし、その結合の環こそ、また逆にその党建設すなわち、党にプロレタリアート大衆を大胆に結集させる事にあるのである。我々の組織は、この事を軍事闘争の中で闘うその陣型として確立されねばならない。

我々は、この間確認され続けて来た事をもう一度だけ確認しよう。

①革命とは階級戦争であり全社会的闘争であり、やはり戦争である。

②共産主義者の任務は、共産主義社会を建設する事であり、共産主義運動を展開する事であり、そして共産主義革命を達成する事である。

③共産主義革命とは、我々の目標であり、我々の生きた現実であり、それは即ち、革命的行動を実践する事である。

④革命家は、文献やおしゃべりからは何も生まれはしないという事を確認する人達の事であり、唯一闘う人達、革命する人達、行動する人達をのみそう呼ぶ。

⑤生きた現実から出発しない革命行動は空論であり、革命行動を有さない現実の運動は無意味であり、その両者の結合は唯一、行動・実践のみがなしうる。

[1] 軍事組織＝軍事細胞の建設

[2] 政治組織＝軍事組織＝革命組織という党の実体

我々の組織は以下の内実を確立し続けねばならない。

第一に、一切の階級闘争の現われ、自然発生的なプロレタリアート・大衆の闘い、反帝諸闘争、すなわち、それ自身では決して政治闘争の根幹としてある権力問題を解決し得ない、しかしながらそのプロレタリアート・大衆それ自身の自発的闘いの中での組織性、団結力、攻撃性そして社会性、階級性が来たるべきプロレタリアート社会＝プロ独樹立の根源的基盤として存在する。その目的意識性の萌芽としての自然発生性こそいわば生産関係の矛盾の結果として現われが生じさせる、プロレタリアートそれ自身の反抗・憤激の増大、すなわち諸々の改良闘争、経済闘争、賃金闘争あるいは自由のための闘争、民族的・社会的・差別・抑圧からの解放の闘い、反帝国主義闘争、反権力政策阻止闘争、それらのいわゆる民主主義諸闘争を党・共産主義者がそのプロレタリアート・大衆の闘いの中で、自らその闘争を組織し、先頭で闘い、一切のプロレタリアート・大衆の闘いの現れをそれ自身の労働者闘争の発展、強化として指導し抜きつつ、たとえ一歩でもプロレタリアート大衆の自由と解放のための闘いを拡大し、強化するその闘いを堅持する事。しかしその内部で、民主主義闘争、いわゆる経済闘争の外部から、それらの民主主義的諸権利獲得のための闘争が、真に勝利するその道たる資本の経済的従属からの解放、私的所有の廃絶と生産手段の社会的共有、すなわち所有と労働の分離の廃絶を終局に於いて勝ち取らねばならないという事を指し示す事。将にそれ故、生産関係の結果としての矛盾表現たる、いわゆる交換関係＝流通過程での現われに対する闘い搾取の廃止＝不払労働の奪還（日共）、疎外からの回復＝労働商品化の廃廃（革マル派）＝「一日の正当な労働に対する正当な賃金を要求する」闘いのみに対して、生産関係そのものを巡る闘い、生産関係の中での階級関係を止揚する闘いを先の共産主義党でなければならないし、もとより、そのための政治組織でなければならない。第二に、この政治闘争＝権力闘争は、将にブルジョア独裁を打倒し、社会主義＝共産主義を実現するためにプロレタリアートの独裁権力はもとより、世界的単一のものとして、すなわち世界プロ独として組織しなければならない事に於いて、そのブルジョアジーの独裁が私的所有の侵略・抑圧体制＝差別分断支配攻撃である事、そして全戦線を独自的に武装させ革命軍＝赤軍の建設を押し進める事、その中で革命戦争＝建軍武装闘争の実践的展開を持久的に闘い抜く事これが今日の我々前衛＝共産主義運動の日本に於ける第一の任務である。

またこれらの闘いの中で、侵略・抑圧・反革命＝差別分断支配体制の日帝の今日的表現たる強収奪強蓄積＝インフレ政策に対する全ゆる形態での闘いを強化し確立する事、この闘いを個別の改良闘争・賃金闘争～組合闘争から全国的政治闘争として引き上げる事、この事は経済闘争を経済主義的立場で闘うのではなく、プロ独運動＝共産主義運動として社民・社帝との闘いも含め、我々の重要な環となるであろう。

☆☆ 帝国主義 ―社会帝国主義を世界革命戦争で打倒し、世界プロ独を樹立せよ！
世界同時革命勝利！
世界党 ― 世界赤軍 ― 世界革命戦線建設！

戦略スローガン

◎ 万国の労働者・被抑圧人民は団結し、世界革命戦争―世界プロ独―社会主義共産主義建設の社会主義革命に勝利せよ！
- 世界同時革命勝利！
- 帝国主義―社会帝国主義を世界革命戦争で打倒し、世界プロレタリア独裁を樹立せよ！

◎ 現代日和見主義―現代修正主義を粉砕し、世界党―世界赤軍―世界革命戦線を建設せよ！
- 日本プロレタリアート人民は、第三世界解放闘争と世界革命戦争で結合し、帝国主義と社会帝国主義の侵略・反革命戦争を粉砕せよ！
- 侵略・抑圧・反革命―差別分断支配攻撃粉砕！
- 安保―NATO―ワルシャワ条約＝国際反革命同盟粉砕！

◎ 米帝国主義の対日反革命抑圧粉砕！
- 日本帝国主義打倒！
- ソ連社会帝国主義の反革命粉砕！
- 社帝・社民の反革命策動を粉砕し、プロレタリア独裁の権力機関＝世界革命戦争の闘争機関＝臨時革命政府（革命戦線政府）を樹立せよ！

◎ 非合法中央集権―職業革命家の党、軍事組織―労働者地下細胞の党建設！
- 党の武装を核心とする建軍―武装闘争堅持！
- 労働者を基礎とする被抑圧人民の統一戦線建設！ プロレタリア革命軍＝赤軍建設！ 社会主義革命戦争―全人民武装蜂起を闘い収る正規の攻囲建設！

の共産主義政党＝革命党が自己を軍事を担う党、世界革命戦争を闘い抜く党として確立・存在させねばならず、プロレタリアートの革命軍、それは将に赤軍であるが、その赤軍を維持し、発展させるものとして、その自己の政党の組織を確立させねばならず、それ故、その事は将に党が、政治闘争—権力闘争＝世界革命戦争を闘い抜き、その戦争に勝利しうる党、すなわち軍事組織でなければならない事を意味する。第三に一方で共産主義政治—共産主義運動の実体的体現者であり、一切の階級闘争の現われをその中で闘いつつ、外部注入としてこの共産主義運動への止揚を、共産主義政治の逆流として、強固な系統性と目的意識性でもって闘わねばならない事、他方、それが不可避の権力攻防—軍事闘争—革命戦争として内実を有さねばならず、死にもの狂いの、政治警察との闘争—戦争を闘い抜かねばならないその強固さを要求される事、その事はすなわち、第一、第二の点の結論として、この組織が革命家組織でなければならない事を意味する。つまり、単なる労働者闘争の中での献身的、戦闘的戦士＝労働者革命家の運動性のみでなく、全生活—全領域を、党と共産主義運動の中に於いて表現させる、革命を一生涯の仕事として闘う、職業革命家の強固で、系統化され鍛練された組織的集団でなければならない。

これらの内実は、今日の組織現実に於いては、以下の様に定立化される。すなわち、我々の党—組織は、第一に、中央集権＝民主集中制であり、第二に、非合法＝地下体制であり、第三に、職業革命家の組織であり、第四に、軍事組織＝軍事体制であり、第五に、細胞—軍事・地下・党細胞＝労働者秘密細胞＝赤軍細胞を基本単位とする組織である。

世界プロ独を建設する過渡期世界の共産主義運動—共産主義組織は、世界革命戦争を闘い抜く、非合法・中央集権・職業軍事組織・軍事細胞の党でなければならない。

3　共産主義運動と民主主義闘争の結合の環とは何か

職革組織の基本を党細胞—労働者地下細胞とする事、その細胞は軍事細胞＝赤軍細胞である事は共産主義運動と民主主義闘争、レーニンの言う社会主義と労働運動の結合の、今日的環である。我々は、今日までこの結合環を一方で戦術的に語り、他方で純粋組織問題としてのみ語って来た。その結合、党＝共産主義運動のひとつの大衆的媒介、いわば統一戦線基盤の部分にしかすぎない、レーニンの時代に於けるソヴェトを今日的にアナロジーする事で、いわゆる人民組織委員会を軍事組織委員会と分化させ、そのもとに、まったくの純論理的で、他方、純組織戦術的な、いわゆる軍の倍養機関、付属機関、大衆宣伝部としての結果し↘

↙か保ち得ない革命戦線という組織形態をその中間組織として維持していた。だが、共産主義運動（政治）＝党と、民主主義闘争＝労働闘争の結合は、党そのものの民主主義闘争—プロレタリアート・人民の階級闘争の現われの中での存在、運動の内部での結合以外にあり得ず、その環になにかあるべき実体—組織を位置付ける事こそ、逆に党をその様な中間組織に解消させるものであり、また党建設と、階級形成を＝大衆闘争戦術＝組織戦術の戦術主義を生み出す。

4　ブント主義と革共同イズム

いわゆる今日まで新左翼運動と呼ばれて来た、日本に於ける十余年の革命運動への闘いの、その特徴的二つの傾向、ブント主義と革共同イズムの二者の闘いの環は、すべてこの党建設と階級形成の中での二元化は、党建設と階級形成が生きた階級闘争の現実、プロレタリアート内部の闘いの中で結合される事を不可能とし、一方の党建設は生きた階級闘争とは無関係の、いわゆるあるべき姿の反映＝観念と純イデオロギーでの党の建設を生む、し、他方、党建設の戦略的地平を喪失した階級形成の独自化は、いわゆる純粋民主主義運動としての下からの自然発生的運動への拝跪、すなわち悪無限的な民主主義戦術＝大衆闘争戦術＝組織戦術の戦術主義を生み出す。

この自然発生性の組織論結果に於いて二元化、それぞれ独自化させるものに他ならず、将に党の自然発生性に党が解体されてしまう事を意味する。

↙いという運動なきイデオロギー体であり、これらが不断に組織としての自然発生性、党を階級形成の自然発生性へイデオロギーで解消させる、まったくの解党主義へと陥いらざるを得ない。しかし革共同イズムが、いわば大衆闘争の自然発生性の中での組織戦術の展開に、唯一その党的実体があるという存在故、一方で、たとえ自然発生的、民主主義闘争の純化した形態＝結果への闘いの局面のみの地平であれ、この革共同イズムは、組織の量的拡大、いわゆる組織戦術での勝利は存在するのである。一方でイデオロギッシュな、いわば宗派としての党の運動なき理念の実体と自然発生性—民主主義闘争・大衆闘争主義、いわゆる交換関係での闘いに全ての階級闘争を一面化する労働組合主義としての大衆運動の量的存在として。革マル派が、この革共同イズムの純化を計り、中核派がプロ通、革通派のいわば内部で有するブント主義＝党建設↘外部注入の地平の内部からの要求に苦闘する時、今日の「新左翼」運動の終焉をめぐる革共同両派の党派闘争は、「新左翼」運動総体の止揚を巡り、闘われざるを得ない。結局に於いて組織戦術と自然発生的運動の量的拡大の一点という現実で今日までの「新左翼」運動総体の過渡的性格の中で、ブント主義に勝利した革共同イズムは、しかし階級闘争の発展そのものから、今度は逆に結着を要求されているとも言える。

5　組織論から見たブント主義と連合赤軍・臨総分派

他方、ブントは革共同のいわば組織戦術主義に対して、革命的戦術論とも言うべき、戦略措定の優位でもって、60年代階級闘争の政治闘争としての発展を領導し得たにもかかわらず、他方、党を戦術の延長上に機能的に位置付けるその党建設組織論上の決定的限界は闘争局面での優位が、しかし組織建設・大衆組織の領導という局面で、革共同両派に大きくその差をあけられざるを得なかった原因である。「政治過程論」に代表される、いわば戦術主義の第二次ブントは、この小戦術↘大戦術の連続性に政治闘争を位置付け、その基本としてまったくの正当的立場を有する階級闘争を権力闘争から位置付ける事をなし得ながら、一方で組織に於ける不断の戦術主義的な自然発生性と、他方、階級形成の独自化を結果とせざるを得なかった。つまり、権力闘争と大衆闘争、共産主義運動と民主主義闘争の結合を、それ自体は正しく追求しつつも、その環を下からの戦術展開、つまり民主主義諸闘争の戦術的徹底化＝小戦術から権力闘争としての戦術＝大戦術へ自然発生的に移行するという規定に至らざるを得ず、それ故、党は↘

↙不断の革命的戦術主義＝戦術的徹底化のための機能的媒介、あるいは、ズバリ徹底して闘う、革命的敗北主義の集合体、戦術的、力学的、突撃体の位置へと規定されていく。従って、ブントの組織は常なる戦術＝現状規定の運動的正しさを有しつつも、大衆闘争部隊の単なる先頭部分＝よく闘うゲバルターの位置としてしか党組織を規定できず、組織なき運動としてのブントの位置は規定されてしまうのである。この党の機能化と階級形成の自然発生的独自化の戦術的規定は、一方で党を純粋戦術上での機能的組織＝戦術組織＝戦闘団へと陥いらせ、他方、党建設を階級形成に解消させてしまう。一方で徹底して革共同の組織戦術主義としての党建設の内容を批判しつつも、しかし、その党建設上の自然発生性は革共同イズムの裏返しであり、単に戦術展開での優位性でしか自己を保てないそれは、組織に於ける革共同イズムの敗北を規定し、他方、その戦術での優位性の徹底化、革命的敗北主義の純化として、戦術の高度化、戦闘団主義、玉砕主義を内部から生まざるを得ず、権力闘争への移行を軍事力学的に党建設を戦闘組織建設一般に、決意と技術の組織に純化されてしまう。それが自然発生的な地平であるだけに、その党建設上の自然発生性の不断の危機は、組織を、その戦術左翼として決意と技術に党の全てを代行せざるを得なくする。

このブント主義の頂点こそ、赤軍派の一貫した流れであり、他方、党建設と階級形成の二元化のうえで、党建設を反省と自覚の契機としてしか位置付け得ず、不断の観念主義、悟性主義へと党を導く、その革共同イズム今日での革マル派に典型化されるそれを内部に流入させる事でもって「共産主義化」を計ってしまう、連合赤軍の新党結成の結論が歴史的に存在するのである。党建設に於ける自然発生性・ブント主義の極限化と革共同イズム、革マルの秘かなる結合、それこそ連合赤軍の敗北の組織論上の根拠に他ならない。他方連合赤軍の清算を自己の唯一の党派性とした臨総派は、しかしその「思想問題での克服」というイデオロギー主義の基盤ゆえ、党—党建設をイデオロギー一般のいわゆるスコラ主義・悟性主義・観念主義で語る方向と、他方、党を「プロレタリア化」するというその方向が、単なる労働闘争との結合一般に、共産主義政治と権力闘争への指導の問題を欠落させてしまうその結論は、下からの党建設として、あるいは、戦術突出に代置しての組織戦術主義として、いずれも党建設を階級形成一般に解消させてしまうのであり、党建設なき階級形成一元論は、不可避に民主主義闘争での闘争指導を巡る闘いのみでの党派闘争の中で、反革命派＝革マル派へと移行する部分を生み落したのである。

の同心円的拡大という悪しき自然発生性、解党主義へと陥いる。党の悟性主義、観念主義への純化他方、自然発生的民主主義諸闘争での戦術へゲモーンへの党の解消、この臨総派の実体こそ、革共同イズム＝革マル派への自己の売り渡しに他ならない。ブント主義の徹底化の闘いの中から、真の党建設への苦闘を続けて来た赤軍派を、完全に清算することで、その苦闘を見事に革マルへと売り渡した実体こそ、これら同盟内最右派・臨総派分派の本質である。しかしこの革マルへの屈服を規定するのは、他ならないブント総体の革共同に対する、いわゆる反スタ・トロツキズムに対する党派闘争の不確立である事は言を待たない。臨総分派と日向派はこのブントの再度の革共同に対する敗北の表現である。一方で赤軍派が、革共同に対し、権力闘争＝軍事の問題で切り込みを開始し、八派政治の解体を中核派の軍事への接近として現実化しつつあるその時に赤軍派の一部、いやブントの一部から、この「新左翼」総体の止揚を巡る党派闘争の中で、反革命派＝革マル派へと移行する部分を生み落したのである。

6　党細胞—赤軍細胞の建設、党建設こそ結合環である

共産主義運動と民主主義闘争、社会主義と労働運動の結合環こそ、正しく党建設そのものであり、民主主義闘争—大衆闘争—労働運動の内部で自ら

その自然発生的闘争を最先頭で闘い、指導し、それへ真の勝利すべき道たるプロ独樹立と政治闘争としての革命戦争への止揚を、将に共産主義政治

としてその労働闘争の内部で、しかし経済闘争の民主主義闘争の外部から注入する事、その組織実体として、完全非合法、職業革命家組織としての細胞による工作、その建設＝自己増殖、軍事組織としてのプロレタリアート人民の奥深く、自由自在の共産主義実践者たる赤軍細胞の建設、成長、存在こそ、その実体的環であり、それ以外のものでは決してあり得ない。諸階級・階層統一戦線でもあり、党派間統一戦線、地域統一戦線権力でもあったソヴェトは、今日にあって、世界革命戦争統一戦線＝世界革命戦線としてのみ、蜂起の機関ソヴェトに対し、世界革命戦争の機関・世界革命戦線としてのみ語られるのであって、過渡的権力機関としてのその位置もそれ以上ではなく、今日の党の組織機能にこの事を何かしら独自化させることは、将に党の中間組織への解消、不断の左右の解党主義を生み出す。全ゆる階級闘争の現われに対して、広く、深く、党細胞＝赤軍細胞を建設・配置する事を通じて、一貫した共産主義政治の一元化として階級形成を徹底的に進める事、全ゆるプロレタリアート・人民の呻吟、苦悩、悲惨さを共有し、その根源を暴露し、プロレタリアート自身のそれへの反抗、憤激の増大を援助、助力しつつ、しかし他方で、プロレタリアート自身の、資本主義体制下に於いて、唯一勝利する階級としての自己の階級意識のヒラメキを確実に引き出し、資本自らが準備する、プロレタリアートの大工場性、共同労働を媒介とする、組織性、団結力、闘争力、階級性、いわゆるマルクスの言う産業労働者軍としてのその階級的本質を対自化させ、一切の闘争を生産関係とそれに規定された権力を巡る闘争へと導く事、この細胞の工作・闘争こそ、それを通じたプロレタリアートの自己組織化と武装こそ、そして細胞拡大・党建設こそ、階級闘争の勝利の環である。ここに於いて共産主義運動、共産主義政治の貫徹の一点として、党建設と階級形成は断固として一元化されねばならない。世界革命戦争＝世界プロ独、そして社会主義建設という一点に於いて、全ての民主主義闘争・労働運動は止揚され、政治闘争をプロレタリアヘゲモニー、プロレタリア運動としての政治闘争として発展させる事、この政治闘争＝戦争下に於ける党細胞＝軍事細胞＝軍事組織としての党建設が、我々の唯一の組織上に於ける問題の解答である。

7 細胞建設は建軍＝武装闘争として工作＝戦闘＝労働の結合の中で生まれる

党の武装、人民の総武装、革命軍建設を勝ち取り、世界プロ独樹立へ向け た闘いを、世界革命戦争として、すなわち革命戦争を政治闘争＝権力／闘争の闘争戦略、闘争陣型とし、世界同時革命の戦略的現実、社会主義革命戦争、社会主義革命の実践的環として進む我々は、その組織環を、党細胞の建設、革命戦争、その端初としての遊撃戦術を実践的に担うその細胞の建設、すなわち軍事組織・軍事細胞の建設として確立した。この党建設、軍事細胞の建設は、かって69年7・6以来、他の口先では軍事を語り、革命戦争を承認し、革命軍建設を党の改編として闘う事を規定しながら、その現実的実践に於いて蜂起の問題を、「時期の問題」や「力量・組織現状の問題」という形で、完全に否定し、不可避の大衆運動主義と軍事反対派・日和見主義への堕落の道を清めた、ブント内諸派に対して我々が一環として主張して来た、「党建設、軍建設は革命的実践、組織的闘争のなか以外からは生まれない」という事を、ここに於いてもう一度確認するだけで良いであろう。歴史が、そして我々自身がこの数年間確認し続けて来たように、戦争の中以外からは軍事の発展、軍事組織の建設、戦争を勝利するの道は生まれないし、その組織の闘争に耐え得る党員＝革命家を生む事はできないのである。今日、かつての右派＝経済主義イデオローグたる、臨総派のあるフラクに於いてさえ、いやズブズブの最右派、清算主義転向グループに於いてさえ認める「建軍＝武装闘争堅持」の戦略方向を、我々は口先ではなく、現実に、組織で、実践で、確認し実行するのみである。今日、ほとんどの党派が少なかれ、権力闘争＝戦争の問題、軍事の問題を語り、部分的にその体制を組織しつつも、しかし党建設の重要な側面に、この建軍＝武装闘争の実践があること、この事を曖昧に位置付ける限りにおいて、その部分にとっての真の革命組織への飛躍は存在しないのである。プロ独＝革命戦争の戦略軸は、戦術実践、組織実践として、この建軍＝武装闘争の堅持、実践として現実化されない限り、それは永遠のありうべき願望にしか終わらないのである。今日まで言い古されて来た事ではあるがもう一度確認するならば、武装闘争を承認する事と武装闘争を現実に闘う事は、雲泥の差があり、そして一言それに付加するならば、この武装闘争を確実に勝利し続ける事は、それらの何百倍もその意味が異なるのである。

我々、赤軍派は今日その再建を前後し、その再建の重要な環に、この建軍＝武装闘争の組織的貫徹を位置付け、そして今日その闘争にすでに突入している。我々赤軍派の今日までの多くの部分が、あるいは指導者自身が、この自らの建軍＝武装闘争の自己闘争の選択の前で、真の赤軍兵士であるかを問われ、その地平でその内実が決定されて来た事を知っている。我々はこの戦闘への直面での進路のその時点での差を、なにかあるべき党の重要な決定環として確認しているのではない。しかしその内実が決定されて来た事を知っている。我々はこの戦闘への直面での進路のその時点での差を、なにかあるべき党の重要な決定環として確認しているのではない。しかし戦争の日帝内に於いては未だ端初期にある今日、それ故、より強固な、より冷厳な政治、軍事カードル、革命家が要求される時、我々は、この事を少したりとも曖昧にして、ルーズな自信のない、いわば投機的傾向を持つ部分を党の中軸に置く事はできないのである。我々は、諸々の事情で戦闘以外の諸活動をしかなせない者に対しても、そしてそれは今日の日帝内プロレタリアートの多くの部分の現実の反映であるが、それらの部分に対しては、その適切な党としての組織方針・闘争現場を指示する事を通じて、党の教育指導をなして行く。連合赤軍がこの党員の成長を一方で観念的に、他方で戦術的に、武器と共産主義化として一挙的に勝ち取ろうとした、その党の敗北を（それこそ「共産主義化＝粛清」であった）我々は、党の成長・発展をプロレタリア階級の中での共産主義運動と民主主義闘争の結合、党のプロレタリアート内部での建設、党細胞＝軍事細胞の建設の、長期のねばり強い、除々にではあれ、確実な、しかしそれ故尚一層困難な、その持久的革命戦争の中で復権する事に於いて、自然発生性としての観念・悟性主義と戦術・技術主義をプロ独＝革命戦争陣型の長期路線＝目的意識的闘いとして、その止揚・克服の重要な環を規定している。全ゆる人民、全てのプロレタリアートを革命戦争に動員する事、これが我々の目標の第一歩であり、そしてその事はまずそのプロレタリアートの中核、党が革命戦争を闘い、指導し得る組織力・指導力・軍事力、そして政治力と思想的強固さを有する事によってのみ獲得されるのである。これ以外からは始まらないのである。単に口先で革命戦争を語り、建軍武装闘争堅持を承認するだけでは、長期路線と称して、工場＝労働闘争に結合する事、プロレタリアートの中に入る事のみでは、何ら我々は成長しないのであり、それはただただ、自然発生性に拝跪すると同時に、今日の即時的なプロレタリアートの反抗の闘争地平に、すなわち民主主義闘争にプロレタリアートを押し留め、社会主義革命、プロ独樹立を何か遠い彼岸に置く、将に民主主義に社会主義を解消させる解党主義に他ならない。この敗北をあえて臨総派をあげるまでもなく、我々は我々自身のこの肉体で経験しているし、またここで、あえてレーニンの『なにをなすべきか』を取り出す必要も、「外部注入」の問題を述べる必要もないであろう。

そして、この細胞建設は、その細胞の自己拡大として、それ自身が一切の階級闘争の現われ、プロレタリアート・人民の諸闘争の内部で、共に闘い、存在する事を土台にする事、その事を媒介にいわば、レーニンの言う社会主義の手段としての民主主義としてそれを位置付け、それへの政治としての共産主義政治を注ぎ込む事、この事は、具体的実践としては、プロレタリアート・人民との闘争・生活基盤を共有する意味に於いて労働の、民主主義闘争を共産主義運動へと止揚させ党建設を勝ち取るという意味での工作の、そして共産主義運動を革命戦争の闘いとして建軍＝武装闘争としての闘う意味においての戦闘の、いわゆる政治＝軍事＝生産の結合一体化されたものとして、もちろんその状況下に於ける部分性は存在しつつも、その原則確認、基軸をその結合として確立する事であり、工作＝戦闘＝労働の結合実体としての党細胞＝軍事細胞の現実実践が存在するのである。

①建軍闘争は、すなわち軍事活動によってのみ、建軍＝武装闘争の実践によってのみ貫徹されるものであり、それが今日の過渡期世界における党建設の組織的環である。軍事組織の党建設は、それ故、遊撃戦戦術を端初とする革命戦争が軸であり、その組織実体は党中央の政治・軍事中央司令部建設、革命軍＝赤軍の建設、党細胞＝軍事組織＝労働者地下軍事細胞の建設の今日的最重点活動の三点の達成によって現実化される。

②赤軍は、政治＝工作、軍事＝戦闘を、一体化させた革命実体であり、部分的ではあれ、同時に生産＝労働をも結合させるものであり、その主体は資本主義～市民社会の深部に存在しながらも、地下非合法にしかも公然と大胆に労働者＝人民と共産主義政治で目的意識的に結合する事に於いて、共産主義運動の実践主体であり、プロ独樹立の組織主体である。

③マルクス主義を基軸とする赤軍の政治・軍事思想は単なる組織的団結や、あるいは理論的共有のみで確立されるものではなく、すなわち実践的運動の共同性によって体現される。マルクス主義＝赤軍は規律～組織、理論～綱領を内実化する運動～実践であり、生きた階級闘争の現実である。

建軍＝武装闘争＝革命戦争を闘う中で赤軍に結集せよ！

全ゆる階級現場で闘争局面で、すぐさま軍事行動・武装闘争～ゲリラ闘争を開始せよ！ 無数の地下組織＝軍事組織を建設せよ！ プロレタリアートの闘う革命組織＝革命軍＝赤軍を、共に建設しよう！ 我々のプロレタリアート兄弟・同胞への第一のアッピールはこうである。

この闘争＝戦争の現実の中でのみ、我々の党建設は実体を有しうるし、その組織を確立しうる。我々にとっての組織問題は単なる組織思想や組織戦術ではない。あるいは単なるイデオロギーの凝縮したものでもない。それは、荒々しい階級闘争＝革命戦争の目に見える実体・反映であり、レーニンの言う、政治の唯一の表現しうるものとしての組織である。我々の組織とは闘いの運動そのものである。

特別声明

○○○○××闘争の地平を更に拡大し

全国＝全土を××闘争＝革命戦争の炎でおおい、帝国主義者それへの協力者を革命戦争＝武装闘争の恐怖の底へ突き落せ！

戦争＝戦闘の持続的勝利の地平を維持し

全戦線＝全戦士は革命軍＝赤軍に結集し、プロレタリア革命党＝赤軍派を強化せよ！

共産主義者同盟
赤軍派日本委員会
中央軍事組織部
（中央軍）

連合赤軍敗北と総括論争—臨総派分派

1　総括論争の階級的地平

連合赤軍の敗北は有形無形の影響を日本に於ける革命運動に与えざるを得なかったし、それは日帝の70年代戦略としての侵略・抑圧・反革命体制の急転回の中にあって、この敗北の生んだ総体的後退期は一方で60年代後半に於ける戦闘的民主主義派の残存を明確に後方に、一層腐敗するものとして葬りつつ、他方で日帝の生じさせる矛盾への全ゆる局面での即時的ではあれ、広範な持続的な反抗—闘争が発展しつつもその指導環として政治的基軸—指導部の不在ゆえ、それ自身の政治的発展が不断にプラグマチックにならざるを得ないという局面を生じさせている。その意味で連合赤軍の総括とは決して終焉した運動の静止した立場での死んだ総括ではなく、持続する階級闘争の闘争続ける立場での生きた総括としてなさねばならないのであり、それは日本—世界に於ける真の革命党の建設という党建設の主体的立場を確立し続ける事を軸に、それへの結合としてこの総括的立場を我が同盟総体での党内闘争として組織し、その中に於いて同盟自体の再建を獲得すべく確立させる事であり、それは即ちその総括主体そのものが現実に階級闘争の諸実践、革命運動の主体的・実践的展開を闘う中に於いて、これら総体の総括から党建設までをも射程化してゆくものでなければならないという事を意味していたのである。将に総括作業はこの階級実践の中で真に検証され、深化されていくのであり、その意味に於いて、総括＝党内闘争〜同盟再建〜党建設は同時一体的であり、それ故この総括論争は綱領路線論争として、唯一その実体を有し得たのである。

しかし、現実に於いて連合赤軍敗北以降の一切の総括作業は死んだ総括として、いわば自己の主体的運動検証を党としての立場において貫徹する事を拒否した、将に「敗戦処理」としてのその立場以外なかったのである。確かにその立場にあっては、連合赤軍—赤軍派を清算し葬り去る立場であった臨総派分派はその処理の絶対的優位性としてその最大の有効性とエネルギーを有し得たのであり、他方、この総括立場を一方でイデオロギー主義的に、他方で大衆的戦闘性の立場でしかなし得なかった他の左派＝止揚派の諸分派はその党的立場、党建設の主体的組織織員を党的に成長させる事さえできない不定形でルーズでそして組織的戦闘性の喪失した曖昧な組織へと自己を陥いらせ、それ故結果に於いて本来真の赤軍派の再建の主軸たるべき同志達を分散させ、個人に解消させそして各分派—フラク自身も個人的集合体としてしか確立し得なかったのである。イデオロギー主義と戦術主義の間を不断に動揺するこのサークル主義は、その唯一の自己主体の基盤を大衆闘争での戦闘性として、そして他方で臨総派分派に対する絶対的流する反動期＝後退期にあって、真に誠実で献身的な活動家たらんとし、そしてそうであったという事を知っている。今日すでに戦線自体を離れた者さえその数を多く存在させている時、我々はその苦闘を継承しその事業を発展成長させる事でその彼らの限界を自ら克服したいと考えるし、そして実はその環こそ、彼らが望みそして模索した、党建設—綱領路線確立の我々の基本的立場を我々が、彼らのある時は単純戦術主義〜大衆運動主義〜下からの党建設主義、あるいは純粋観念主義〜

主義に対する根幹に於ける経済主義の結論としてその立場を左翼反対派としてしか位置付け得なかった事の再現でもあった。

階級闘争の真の本質はそれが表現されてしばらくたってからその実体が明かになるものである。連合赤軍敗北以降はなばなしく登場した「総括」と称するものの実体が二年有余経た今日、ものの見事に我々の眼前に存在している。我々は今日、その残存物を自らの党建設の闘いの中でキレイサッパリと処置してゆくのであり、それこそが真の総括の立場である。

我々はすでに何回も確認したように、連合赤軍の総括をなし得るには、未だにあまりにも非力であり、その実体を有していない。総括をなし得たとは決して結論できないのであり、我々の総括の真の確立は、我々の党建設の勝利であり、一定程度確立された綱領的路線的立場の階級実践—階級現場の中での現実的獲得であり、党内闘争—同盟再建の同時一体的確立の中でのその勝利であり、つまり我々の生きた階級闘争の実践の一歩一歩こそが、真の連合赤軍の総括の深化の一歩一歩なのである。

2　階級闘争—党建設での敗北としての左派

武装闘争堅持を掲げた再建委—革戦委、下層プロと戦争の中での結合を軸とする釜地区委、そして釜＝底辺運動とパレスチナ＝テルアビブ闘争を出発点とする　×　×

F、この同盟内左派諸分派はそれぞれ多種多様な形態で敗北を確認せざるを得なかった。

しかし、その党的敗北の根幹は共通して存在している。第一に党建設に於ける自然発生性＝下からの党建設主義であり、第二に大衆運動主義かテロリズムかのいずれにしても戦術主義であり、第三に組織に於けるサークル主義・解党主義である。その意味で臨総派分派の対極であり、同列であり補完物でしかなかった。この事は一方で臨総派分派との分派闘争の中で党内闘争の中で、党主体なき党内闘争主義として、あるいは単なる論争＝おしゃべり主義かあるいはそれへの黙殺＝逃亡という形態で現われ、他方、この諸分派が主要環とする党建設＝建軍革命戦争の中での空論主義とそれを現実化し得ない立場としてその結果が表現され続けた。この党的根幹、

臨総派分派の諸君も含め、階級闘争の中にあって逆釈主義＝運動なき綱領解発生性＝解党主義を我々が荒々しい階級闘争—革命戦争の中での党建設〜綱領・路線闘争での勝利、すなわち全てのプロレタリアート人民を動員し組織し訓練しうる我々の革命戦争—プロ独運動として、の組織的路線—基本陣型の確立こそがその克服の環なのである。

では何故に彼ら左派諸分派は、革命戦争の中での党建設に、また真の赤軍の建設に敗北せざるを得なかったか。それは総じて我々の綱領的立脚基盤の総括、

イデオロギーサークル主義＝運動なき綱領解釈主義の、二者の自然発生性＝解党主義を我々が荒々しい階級闘争—革命戦争の中での党建設〜綱領・路線闘争での勝利、すなわち全てのプロレタリアート人民を動員し組織し訓練しうる我々の革命戦争—プロ独運動として、の組織的路線—基本陣型の確立こそがその克服の環なのである。

では何故に彼ら左派諸分派は、革命戦争の中での党建設に、また真の赤軍の建設に敗北せざるを得なかったか。それは総じて我々の綱領的立脚基盤の総括、

的止揚継承の革命論確立の闘いに於ける徹底した敗北であり、その中での一方での12・18プント—赤報派へのイデオロギー上の屈服、他方でのいわゆる独立戦闘団＝戦闘サークル主義への組織建設—戦術上の屈服であり、これはつまるところ過渡期世界の高次な自然発生性への敗北の総体的表現であり、我々の過渡期世界論—三ブロック階級闘争論—攻撃型階級闘争論＝パンフ№4地平の総括的立場の未確立に規定される具体的には、連合赤軍敗北総括の誤謬」総括、もしくは「プロレタリア階級性の欠落＝階級に立脚していなかった」事での階級形成論＝党建設論欠落の「プロレタリア主義」での解答、そして銃撃戦の戦術的評価一般と武装闘争の戦術的位置付け一般での、逆に銃撃戦＝革命戦争を戦略的立場で否定、捨象し、革命戦争の戦略的発展の問題を自然発生的戦術問題に純化し、その結果、量と時期、あるいは決意の問題に解消させしまうのであり、その事での自己の党的立場の二一様の形態＝イデオロギー純化＝サークル研究会主義か、戦術主義＝大衆運動での解党主義に陥いった事の表現である。これらの党建設上での決定的限界が、つまるところ、この二年間彼らをして遂に綱領的立場—党建設の立場を確立化させうる位置としての党機関紙を自ら発刊し得なかった事に見事に表現されている。

再建委—革戦委は、軸としての戦術レヴェルでの「武闘堅持」一般が、党としての闘いに於いては、戦略的—党建設基盤

確立の欠落故、不断なる自然発生的な戦闘気運のみのサークルと救援運動にしか実体を有し得ない大衆運動主義、その指導を巡る問題のみでの戦術に、そこから　大衆運動しか有し得ない事が、革命戦争—党建設に還元される時、その理論的探求とサークル的研究一般へ、大衆運動主義の裏返しとしての純粋サークル主義へと陥いり、その結果、戦略と党の基軸を有し得ない彼らは、気分上の戦闘と党の建設、そして大衆運動の三つの局面の中で、動揺と分解と混迷を深めていくのみであり、いかに少数であっても党としての組織的運動としての革命運動—革命戦争を闘い得ないその情況は不断に結果として個人へとその組織を昇天させていったのである。今日、革戦委分派は名実共に自己解体を完了させてしまった。

釜地区委は、第一期に於けるいわゆる72年五月以降の釜ケ崎での暴動—下層プロ総叛乱の中で、徹底的戦闘性とそこからの指導性を発揮しつつも、その釜ケ崎の闘いが帝国主義ブルジョアジー〜国家権力の反革命抑圧の弾圧との直接対峙に突入した第二期に於いて、同志××に典型化される自的意識的な地下指導部建設の問題が、確かにその時点に於いては不断の自然発生的な戦術論と組織論でしかなかったにせよ、その闘いは逆に大衆暴動を対置するそれのみの結果その指導部の建設を曖昧にし、大衆闘争の発展期にこそ、逆にその打ち

四月テーゼ問題、のほぼ五点にわたる綱領的諸問題への未解答と、パンフ№4の教条的継承一般、すなわち理念上の単なる静的な世界認識の方法論的立場としての三つのテーゼの堅持、その事自体での綱領的立場の理念＝理論一般での継承、そして他方での連合赤軍総括でのその綱領的＝路線的検証の欠落と、単なる粛清＝「共産主義化」の必然性論とも言うべき敗北総括での単なる「指導上

（7頁へつづく）

固めた地平を有利な形態でもって目的意識的指導部を確立させねばならないにもかかわらず、根源での経済主義・サークル主義故、左翼戦術主義・戦闘的経済主義の本質として単なる大衆戦闘組織建設一般、それへの指導一般に党の建設を解消させる事でもって、一方で階級的基盤の明確化—資本主義批判—過渡期世界に於けるプロの貧困化の問題を綱領的戦略的に確立し、その内実こそ、我々が今日の帝国主義国内での革命勢力—依拠すべき階級の主要な階層であるところの下層プロの階級的解明とそれを内実化する党の階級的立場の確立であったにもかかわらず、その限界を逆に直感と戦闘—大衆闘争の暴力一般でしか解答し得ず、第二期の終焉を同志××達への弾圧と戦術的デロル一般での対抗のみに典型的に、次の第三期73年以降の諸闘争での権力の反撃と大衆闘争の一定の限界の中で、指導部それ自身の位置すら敵に解体され、一定の大衆闘争の自然発生的後退期に、将に解体される形で党としての敗北が表現したのであり、大衆闘争の必然性としての昂揚—停滞の中での、一貫した持続的、目的意識的指導部としての党的主体を確立し得ず、逆に大衆闘争の停滞期の中で創出される不断の大衆自身の潜在的本質的階級性と暴力性を、党への結集として導く事なく結果として、第一に大衆闘争の指導の位置での敗北が、第二に党建設での敗北—革命戦争—プロ独運動での敗北として結実し、その「総括」を将に第三に敵権力自らが、破防法体制—指導部への謀略作戦での殲滅化と大衆闘争への軍事的政治的包囲圧殺として、釜地区委としての闘いの徹底的敗北を表現させたのである。釜地区委は、本質に於いての自然発生性を、組織に於ける戦闘的サークル主義・戦術集団としての経済主義の左翼的表現に、戦略上のプロ独—革命戦争への路線的指導性抜きでの大衆運動主義、その補完としての戦術テロリズムへと、総じての解党主義・経済主義の道を、その意図とは関係なく転落し続けた。しかし彼らの戦術主義ではあれ、下層の中での党建設の立場と、そこでの革命戦争—武装闘争の追求は、その活動に於ける献身性、誠実性を含めて、連赤敗北以降の我々の再出陣の大いなる第一歩を確立してくれたのである。現在釜地区委は、権力からの攻撃、党建設—プロ独—革命戦争の闘い、釜ケ崎での大衆闘争の指導、その三重の敗北の中で、名実共に解体された。

× × F、テルアビブ闘争—パレスチナ解放闘争、総じての民族解放闘争と、下層プロの闘いの二者の結合環を、いわゆる第三世界の同質的立場で帝国主義—後進国の経済決定論的ブロック分類をプロレタリアート人民の階級闘争の発展の主体的立場からのそれらの解明と結合の追求としてその範を超え、そこにその、過渡期世界論の総括と、また釜地区委と同じく連赤総括の出発点を確立したにもかかわらず、不断のそれらへの結合の視点を支援一般での大衆運動局面での運動へと結果として陥いらせ、そこから、組織に於ける一方での運動—自己と切り離された綱領—路線～教派—臨総分派への戦術的対置と運動—実体検証がサークルへと、他方大衆運動上の戦術協議体制的連合体としての個人集団へと、すなわち個的感覚的レヴェルの一致での不定形で分散した大衆闘争機関へと、将に解党主義へと結実し、運動上に於いては支援運動を軸にした連合サークルとしての大衆運動一般の自然発生性に、そこでの闘争力指導力一般に党の運動が解消され、党建設—革命戦争が理念的問題として固定化され、組織運動ではなく、個人運動での評価が大衆との結合環になり、単一化された運動ではなく不断のプラグマチズムへ、その本質たる高次な自然発生性を背景とする小ブル急進主義—その右の表現たる待期主義が表現され、その意味では一切連赤総括も過渡期世界論の総括止揚も、そして世界革命戦争としての民族解放闘争—下層プロ解放闘争との結合も、実体的には存在せず、自己を革命組織—共産主義運動として止揚し得ない、単なる小ブルインテリの啓蒙的運動へと結実させたのである。大衆運動上の組織—体制に、自己の意識する党—共産主義運動は全て解消されてしまうのである。　× ×

Fは今日、その指導部—党—共産主義運動としての内実と運動が要求され、その未解答の中で、停滞と分散を拡大させその敗北の総括の前で苦闘している。

これら諸分派が、その最后の延命とした連合フラク—論争協議会での単一化の追求も、単なる多数派—臨総分派への戦術的対置と運動—実体検証なきイデオロギー論争の場としての位置しか有さず、もとよりその自然発生的解消は必然であり、その中で諸分派のいずれも自己を成長させ打ち鍛える闘いとしての革命運動を表現させ得なかった。

この敗北—党建設での自然発生性は、党内闘争への主体的立場に於いてもっとも鮮明にその内実を表現しており、単なる感覚的批判か野合かの形態をしか有し得ず、それはつまるところ臨総派分派への左翼反対派でしかなかったのである。党建設は、自己が主体的に革命運動を実質化する事を通じて、それと同時の党内闘争—党派闘争として自己を純化する事抜きに、ある日突然確立されるものでもなく、諸分派が分派として自己責任を、階級闘争の中での党内（分派）—党派闘争として体現することに於いて取り切って行かねばならないのである。この党内闘争に於いてもこれら諸分派は党としての敗北を結果したのである。

最後に、その他の今日、個人に還元されている左派—赤軍兵士についても述べておかねばならない。しかし、今我々は、その献身的で戦闘的で、一貫して赤軍兵士であらんとする我が兄弟達に説得力のある言葉を持ち得ない。階級闘争—市民社会の中で自己の使命に忠実であろうとするその兄弟達に今、唯一我々は我々の闘う中での相互批判—相互止揚をしかなし得ないのだと確認している。そしてこの立場は、あえて一定の批判的検証をなさねばならなかった先のかつての諸分派の兄弟達への立場でもある。我々自身が再度より大きく前進を勝ち取る時、全ての部分への総括は、我々の更なる党的団結として体現されるであろう。我々はそう確信している。

（尚、左派の各分派の総括的文章は、その時点、その時点で総括された文章として、今後連続した形でもって本紙に掲載され、その苦闘を総括的に提示してゆくつもりである）

3　臨総路線の破産と臨総派分派の解体

1. 臨総派にとっての危機は何に規定されたか

今日の階級闘争の一定の後退局面にこそ、同盟臨総派分派の危機—破産—解体・状況の一方に於ける要因が存在している事を我々は理解すべきである。しかし、それはプロレタリアート—被抑圧人民の闘争の危機後退であろうか。いや断じてそうではなく、逆にプロ—被抑圧人民の反帝・解放闘争は昂揚・拡大を続けており、今春季の「ゼネスト」の闘いを見るまでもなく、その闘いは、将に基幹産業プロ自身の爆発的闘いとして、民同の圧力を打ち破って展開されているのである。将に今日に於ける運動の危機とは外ならぬ我々の危機～前衛～共産主義運動—党の危機に外ならない。個々の闘争が、政策阻止闘争～反政府闘争の範を従ってもちろん、経済闘争～賃金闘争を超えて、将に帝国主義政府打倒—帝国主義の発生と純化の三点としての国際・階級攻防の現局面である。

今日、これらの三ブロック階級闘争はそれら自身の結合と世界的単一化を要求しており、そうであるが故の世界的権力闘争への逢着としての限界性・困難性の表現である事を確認せねばならない。この三ブロックにおける階級闘争の現状は、我々に於ける戦略規定の中で①米帝・ソ社帝を軸とする第一世界、②欧帝・日帝等を軸とする第二世界③民族解放闘争を主軸とする全世界のプロ革命勢力の第三世界の「三つの世界」構造として要約される。我々の今日的限界はこの「第三世界」の革命運動、とりわけ帝国主義内部に於ける革命闘争に於いて、それらを指導し打ち鍛える前衛党、一切の労働闘争を政治闘争へ、その中軸として権力—政府問題を巡る権力闘争へ吸引させる革命党、その世界党として体現される権力闘争～世界革命戦争を闘う党の未建設にあるのである。帝国主義、社会帝国主義打倒—世界プロ独樹立～世界革命戦争の階級的使命を、世界（同時）社会主義革命として闘い抜き、そこから全ゆる民主主義闘争の社会主義—共産主義運動への止揚、（決して民主主義に社会主義を従属させる民主主義派—小ブル改良派～経済主義・組合主義～現代修正主義、社会排外主義の立場ではなく）その闘いを、日本に於ける権力闘争—プロ独運動として、臨時革命政府—世界革命戦線（日本支部）政府樹立を行動綱領とし、権力闘争の過渡期世界～現代帝国主義下における内実として、一般的非合法中央集権党ではなく、党の武装・大衆の武装・革命軍の建設の根幹として、「軍事組織の党」の建設、赤軍細胞～地下軍事細胞の建設を第一の環とする、日本における建軍—革命戦争、その端初としてのゲリラ—遊撃戦を闘い抜く、プロ独—革命戦争—赤軍の党、その建軍—党建設が要求されているのである。

2. 臨総路線の破産の根源

6・10問題として結実化した臨総路線の破産は将に日和見主義、合法主義、大衆運動主義～総じての解党主義へと同盟を売り渡した右派—清算主義者、中間—ソヴェト主義者、総体の冷厳な階級闘争からの解答である。と同時にその事は、反臨総派としてしか自己を確立し得なかった左翼反対派たる左派—革命戦争派あるいは下層プロ武闘派それら自身の解体～党内闘争の敗北の表現でもあり（それは現実に釜ケ崎赤軍派、　× × F、革戦委赤軍派の全ての解放—破産、そして党への飛躍の前での混迷として現実化している）、そしてまた獄中をも含めた一切の赤軍派の連赤以降の闘いの「党としての敗北」の表現である。6・10問題は決して6・10問題としてのみ把えられるべきではなく、6・10に於ける党中枢自らの、もろ手をあげて敵の獄舎—敵への降服の表現は、すなわち同盟そのものの権力への基本姿勢の結果表現であり、臨総路線そのものの解体・破産が宣告された事なのである。6・8問題は、更にその我々の屈辱に輪をかける以上の意味を持っていない。

＊　ここで言う「6・10問題とは、いわゆる「大菩薩公判」の第一審判決日である6・10に臨総中枢を形成したボサツ被告達が、その判決に対して何ら防禦、反撃の体制を取り得ず、予想される実刑判決を何らなすすべもなく受け入れ、自ら獄に入ってしまうという、いわば革命家として恥ずべき事態を必然的に迎えた事の意味である。これは臨総派の合法主義日和見主義、屈服主義の典型的表現であった。また6・8問題とは、臨総派の第二回臨総が権力に事前にバレていた事。

臨総路線の結論的総括は、「プロに依拠する」という方向からの、改良闘争とプロ独を融合させ、不断に最少限綱領主義たる民主主義闘争への社会主義の従属であり、一切の党の闘いを大衆運動に解消し、その大衆闘争一般でしか自己の闘争を確立化し得ない経済主義、組合主義である。この事を我々はもはやこれ以上あれこれの大衆運動での表現を通じて云々する必要はないであろう。臨総派は、現実的には労研運動（左翼組合主義）と大衆的行動闘争機関に解消されていた事、これ以上でも以下でもない。部落解放闘争で勝ち取った地平も単なる思想形成でしか終わらない事に於いて、やはり階級闘争を発展させる「党の立場」

での前進としては、すなわち一定の政治路線としては結実しなかった。この経済主義、組合主義の発生の根拠は以下である。①連赤敗北を「小ブル共産主義の敗北」と総括する事から出発し、一切の権力闘争への志向を「軍事力学主義」一般で拒否する事を通じ権力闘争＝蜂起と革命戦争への突入の問題を、プロレタリアートの自然発生的到達とそれへの量的拡大の問題としつつ今日における闘争の局面からスッポリとその権力問題を捨象させた事、すなわち帝国主義打倒―プロ独樹立へ向けた闘いの一切の捨象、そこから不可避の大衆運動主義・改良主義への転落、②「世界武装プロレタリアート論」のコスモポリタニズムという規定から「プロの世界性」の否定へと発展し、帝国主義段階に於けるプロレタリアートの階級的同質性を否定し、プロの世界的任務とその根拠を曖昧にし、世界同時革命さえもが、「空想的、平板的」として拒否され、それら総体をもって、不断に自己を一国主義、自国帝国主義との闘いの一面化に終止する完全なる国際主義的闘争の放棄、そして他方、基本的な世界革命＝国際主義の任務を放棄した地点から（すなわち世界革命戦争のもとでの帝国主義本国内プロの階級的任務の否定）逆に、将に結合一般の観念主義、支援、国主義）―社会主義の法支持としてのみの民族解放闘争への立場が導かれ、ここに於いて、スッポリとプロレタリア国際主義が欠落させられ、③「階級的立場の欠落の克服→資本主義批判の道」の方向が、㈠12・8→RGのいわゆる「綱領問題のイデオロギー問題への純化」の思想問題としてしか資本主義批判を把えず、逆にバラキン雑スイ経済学たる蓄積論のスッポリ抜けた「経済的従属」一般へ、しかり、プロの悲劇の根源一般へ、階級措定―そこからの階級闘争の必然性が導かれ（苦悩、呻吟、悲惨が生む）プロの階級的闘い論、㈡不断に「資本主義の結果への闘い」＝交換関係を巡る闘いに純化され、資本関係―生産関係を一切変改しない、階級闘争に変質する道へと進み、㈢一般的反抗の増大を階級闘争の根源とする事よりプロの自然発生性（反抗）が全面的な共産主義への道の環となる事へと結論化され、社会主義の物質的基盤とプロの攻撃性・能動性を措定し得ず拒否し、㈣結果として、唯物史観に導かれ、弁証法と共に確立されるべき資本主義批判を、経済決定論的―現状分析―現状における経済関係一般の解明に陥り、㈤主観主義／科学的社会主義の立場の欠落の一言で、今日の過渡期世界に於けるプロレタリアートの階級的立場の措定が放棄され、またもやここでも静的な一面的な経済分析と他方、資本主義批判（それも誤った中間的な）一本での経済決定論～生産力主義が階級闘争の主要な側面とされ、プロレタリアートの階級闘争に於ける発展過程～高次な段階が、スッポリと欠落し、㈥「武装プロ論」の部分的限界（国際根拠地論として結実する国際階級闘争の即時的アテハメ）を全面的な誤謬としてあげつらう事で、まったくプロレタリアートの武装の問題が、「量的拡大からの自然発生的獲得」として措定される事で、完全な「武装解除＝平和革命＝合法主義」の道へと転落し、㈦現帝論＝過渡期世界論における「世界市場～労働力商品化」の問題として把える出発点での、将に「直観主義的誤り」＝しかしこれは蓄積論・価値論、および剰余価値論の問題から立て直す事でその基本骨格の正しさは逆に証明される＝を、将に完全に全面否定し、三ブロックを有機的に把えず、それぞれ固定化し、それらから本来現帝問題から措定される日本資本主義分析を現状分析として独自に抽象化し世界戦略を欠落させた一国的権力闘争論たる自然発生性の頂点たる（現代カウツキー主義）待機主義＝受動型革命論＝蜂起・ソヴェト主義に屈服（いやそれ以下の経済主義＝社民・社帝・社排の立場へ転落し）権力闘争を欠落させた『正規の包囲』論、レーニンのこの内容へのハジしらずなドロぬり）へと武装解除の理論的ツユはらいを進めた事。これらの各点として、今日の臨総路線の基本的誤謬が規定される。その結論が、①思想問題を軸に「我々の小ブル性を克服しよう」という完全なスコラ論議＝イデオロギー主義の純化～主体性論の裏返しの「自覚的プロ」＝革マル主義への屈服として体現され、②「プロに依拠する」という事でプロレタリアートの即時的な運動に、「あるがままの闘い」＝その自然発生性に拝跪し、共産主義政治を民主主義に解消させ、党を大衆サークルへ解党し、社会主義を労働闘争に従属させる完全な小ブル民主主義派の立場へと陥いり、③「プロの量的拡大・発展一般」を即時的に語る事から階級形成に於ける自然発生論として、逆に党建設と階級形成が二元化され、階級形成が党建設に優先され、その意味で、党＝階級形成論（党の同心円的拡大）の革共同の立場＝党形成を階級形成に解消する立場の裏返しとしてあり、そうしてまったくの共産主義運動―社会主義の内実が拒否されてしまう根拠が存在する。④綱領問題をイデオロギー問題としてしか展開できぬそれは不可避に社会主義の内実が拒否されてしまう根拠が存在する。⑤綱領問題をイデオロギー問題としてしか展開できぬそれは不可避に革命論獲得の立場（路線の獲得）を欠落させ、その内実は、プロの自然発生性への拝跪＝即時的要求への解答としてのそれへの戦術主義＝現実としての大衆運動主義（それは、将にイデオロギー主義＋プラグマチズムたる12・18路線がテロリズム（赤報）と組合主義（蜂火）に分離したように）連赤の自然発生性（テロリズム）の裏返しの経済主義・組合主義としてのそれであり、⑤一切の党の活動が大衆運動一般に対置される事でその戦術も内実において「大衆囲い込み」運動でしかなく、政治は組織戦術一般に解消され、それは政治技術へと純化し、不断のマヌーバーと陰謀、対局に不信と不満～誹謗中傷～政治対立の個人対立化・感情的対立化＝すなわち、ブローカー政治へと変質させ、常なる動揺を生じさせ、⑥その組織は従ってサークル連合の実体以上でもなく、左翼プラクション主義、民同左派的労働組合指導部へと党を売り渡し、地区連合の下からの自然発生的党建設に終止する事。中央集権党の全面否定＝党的路線的一致の全面的欠落＝バラバラ集団でしかなく、⑦権力闘争＝軍事問題への執拗なまでの憎悪は、自己を完全なる日和見主義、軍事反対派、武装解除派へと確立させ、その一点に於いて、今日までの様々な脱走分子、反対派分子の一大集結となり、階級的前衛を背後から攻撃する理論的革マル主義の位置を占め、71年に至る建軍武闘派を全力量をあげて攻撃し尽した事、（しかし、蜂起派、戦旗派あるいは、旧共労党を見るまでもなく、一切が権力＝軍事の問題を軸に動揺し、そしてその中から「分裂」を勝ち取る部分が登場して来ているのだ）⑧革命的左翼との対決を通じて、自己を増々排外的に純化させ、その事でメンシェヴィキから社会排外主義へと発展した事以上である。

結論を急ぐならば、臨総路線とは、①経済主義組合主義②大衆運動主義、③合法主義、④最小限綱領主義、⑤サークル主義、の以外の何ものでもないのである。①権力闘争からの逃亡、②党のイデオロギー主義とプラグマチズムへの純化、③赤軍―赤軍派の否定、④7・6以降の一切の同盟の闘いの清算、⑤ブント（7回大会）以降の内実の否定、すべからくこうなのである。一部の諸君の如く、「赤軍―連赤の思想問題での総括に留めた事」の限界などというのはおこがましいのである。その内容そのもののふんぷんたる犯罪性は、階級闘争の歴史に刻印されるものであるだろう。『緊要の任務（上）』から始まる臨総派のこの転向過程を吸引せしめたその意味で、右派＝清算主義・日和見主義と中間派＝ソヴェト待期主義を野合せしめたイデオロギーとして、同志八木のイデオローグ的立場は明確に総括されねばならない。この間の左派による明確な党内・分派闘争の組織化と、その攻撃の中で左転回をイデオロギー的に吸引せしめたとはいえ、それら左派の一年有余の革命運動への敗北の自己批判総括以上の自己批判が、彼らには要求されるべきであろう。それは将に自己批判ではなく、そのイデオロギーの実践化＝革命戦争の先頭での展開である。

（米付加　尚、臨総路線の勝ち取った地平とは部落解放闘争、下層プロの闘いへの結合であり、階級基盤の拡大である。しかしその内実が大衆運動での前進であること、それ故、あえて論及しなかった意図をくみとってもらいたい）

赤軍再建と臨総野合派の階級的位置

1　第二回臨時総会の獲得地平
2　最右派＝経済主義者の最後のアガキ
3　臨総・野合派の階級的末路

はじめに

日本革命戦争の更なる胎動は、日帝ブルジョアジーの強収奪＝インフレ収奪と南朝鮮への抑圧・反革命支配の強化という将に70年代侵略・反革命建設―大衆武装＝党の武装として闘い抜かんとした連合赤軍の革命的地平を我々は断固として止揚継承する。連合赤軍の到達地平を種々のイデオロギーでもって迂回する諸亡し、それに敵対する日和見主義者諸君には彼らが口先だけでは語る「革命戦争」と「建軍武装闘争」のその重みを彼ら自身に対して実践的に彼ら自身の肉体でもって悟らしめてやらねばならない。

第二回総会を巡る党内―分派＝党派闘争は、短期間で決着を要求されるであろうし、そうであるが故に、また熾烈であるだろう。だが二回総会をプロ独―革命戦争の勝利の第一歩として勝ち取らんとする我々はこの闘いに一切の曖昧性も躊躇も加えないであろう。赤軍派の名をもって「赤軍」の建軍に反対し党の武装革命軍建設の闘いから逃けた世界革命戦争の一翼としての日本に於ける権力闘争＝政治闘争の環～日本革命戦争を、革命軍建設―大衆武装＝党の武装として闘い抜かんとした連合赤軍の革命的地平を我々は断固として止揚継承する。連合赤軍の到達地平を種々のイデオロギーでもって迂回する諸傾向とはっきりと一線を画し、それらの傾向を革命戦争下に於ける分派党派闘争として粉砕し抜く。この中核こそ赤軍（中央軍）であり、そして我が党―共産同赤軍派（日本委員会）である。

1　第二回臨時総会の獲得地平

第二回臨時総会（二臨総）の開催は臨総派分派自身の三重の敗北―自己解体を確認する場として、存在の三重の敗北を用して飾ろうとも連赤敗北以降二年有余、臨総派分派による臨時総会開催＝右派クーデター以降一年有余の彼ら分派の「赤軍派」としての階級的闘い、革命運動の実践が、現実の生きた階級闘争の側から明確に否定された事、共産主義前衛としてのその位置を有し得

ないその現実を鋭く突き付けられたもの以外ではない。第一に革命運動―共産主義運動、そして大衆諸闘争―民主主義闘争の中での指導の敗北、党建設それ自身の経済主義、合法主義、その結果としての解党主義としての敗北、第二に自己の第一の目標とする同盟再建―綱領路線確立―総括闘争の止揚の方向での、いわゆる党内闘争―分派闘争―党内闘争―分派闘争の展開の大きな根拠―根因に我々左派体による74年以降の党内闘争―分派闘争の組織化が存在しており、確かに大きな比重として臨総派自己分解を規定したのが臨総派自身の階級闘争の自滅ではありつつも、しかしその外因として左派による右派中間派―経済主義者およびソヴェト派毛沢東教条派そして党内闘争―党建設での組織日和見主義派総体への、プロ独―革命戦争―プロレタリア革命派赤軍の連赤総括―同盟再建の旗を掲げての全ゆる形態での臨総派分派との対決―党内闘争の闘いのその存在があったのである。本来臨総派分派結成そのものが、対左派諸分派に対する独自的一体化を確立するものとしての連合主義をその基軸にしており、内部に於けるその諸傾向は現実の階級実践の中に於いてもそれぞれ結果に於いて分化し続けてきた。臨総派内に於けるその第一の傾向は、最右派であるそして一時的ではあれ臨総派のヘゲモニーを確立化した、旧都委―徹底清算主義そして旧関西地方委内右派の傾向であり経済主義・組合主義・合法主義を基軸とし、同盟の綱領的立場の徹底解体と、連赤批判その結論として党なき大衆運動としての純粋民主主義派のラインであり、第二には連赤敗北以降の同盟への参加者を軸とする、大衆闘争の指導の問題をのみ射程化し、逆に同盟の綱領的立場を当初から学ぼうともせず、いわゆる大衆闘争指導機関としての党の機能的位置付けと、それへの組織問題のみの解答として『なにをなすべきか』を用し、その路線的綱領的立場を共産主義運動として権力闘争の問題として設定する事をまったく捨象する、将にソヴェト主義・組織教条主義・大衆闘争サークル主義の傾向であり、第三の傾向は下層プロの闘争を一定の基盤に「プロレタリア化」を階級形成一般で語りつつそれへの「人民戦争」路線と権力問題の無責任な体制でもって闘わねばならなかった事であり、それは結果として同盟内党内闘争を、臨総派をめぐるいわば臨総派内党内闘争にのみ一面化してしまった事に典型的に表現される。自己を分派としてその主体的運動のうえで、分派闘争―党内闘争を展開せず、逆に党内闘争を勝利から自己の主体―分派を組織するという逆転した傾向が、たとえそれが確かに同盟を単一の組織として自己が建設し抜くという事であったとしても、結果としてはその党内闘争の闘争局面にあっては不断に組織日和見主義としてのプラグマチズムに陥いらざるを得ず、それは党内闘争の方法論的立場としては単なるイデオロギー一般の論争か、あるいは党内闘争の進め方それ自身についての論争かのいずれにしても、サロン的なおしゃべりでの論争の組織化となり、組織問題にあっては一挙的クーデターとしての論争の結着か、もしくは加入戦術という結果での自己の党的主体を解消させてしまうのであり、それらは客観的に見るならばイデオロギーを軸にしての官僚主義と陰謀主義に対して、それを粉砕するに解体をのみ追求するというクーデター型の党内闘争の組織化に不断に陥いるのであり、その結論はより政治技術を有する部分によるクーデターでの我々自身の一定の敗北としてすでに表現されたのである。自己運動の党主体としての確立のないその中での党内闘争一般の主張は、たとえそれが綱領―路線論争として組織化されようとも、一方でサロン会議としてのイデオロギー論争か、他方、組織問題のみの手直しだけに終わらざるを得ず、その両極を補完するものとして、ボス支―陰謀と政治技術と官僚主義的圧殺と、結果としての野合性が存在する事は不可避である。

我々自身が、かつて同盟内党内闘争を結果として自己目的化し、その結論が「臨総派をとにかく解体せよ」という方向になり、その自己主体なき党内闘争主義が、その種のイデオロギー主義、論争主義、そして陰謀主義を表現した事を明確に自己批判しつつ、しかしその解答は最後での陰謀による我々の一定の敗北―混迷として存在した事を我々は教訓化しているのである。今日、未だに臨総派内の各フラクが、自己を党的主体としての分派として責任ある党内闘争の局面に突入しきれずその論争さえも一対一的批判と言葉の投げあいに終わっている現状は、かつて72年を通しての党内闘争の敗北局面を再現させる危惧を感じさせるのである。

二臨総を巡る臨総内党内闘争、あるいは同盟内党内闘争はその地平を、将に真の党内闘争たる綱領―路線論争へと高める事はできなかった。ある意味では今日に至る臨総内党内闘争もその地平に移行しているとは言い難い。それは綱領―路線論争を闘い抜くべき、それを責任化・主体化しうる自己を形成し得ないなかにあっては当然でもある。そこで行なわれる論争―党内闘争は、自己の主張にまったく責任を取る必要もない、将に、個人論争として終止するからである。それ故、経済主義者は自己の運動の総括もなく安易に口先で「経済主義を批判せよ」と他人事のように叫ぶことができ、それでもっての官僚的延命を計れるのである。彼らのこの数年間の無責任な何回もの「転換」はその表現である。

二臨総を巡る闘いが真の綱領―路線論争とならず、それを提起した部分が、いわば臨総派外から持ち込まれたそれでしかなかった事は、それ以後の臨総派内党内闘争を、単に「党内闘争の進め方」を巡る論争にしか発展化させ得ていないひとつの原因であり、また今日に至るも、結局臨総派分派内部から一歩も出る事もなく、同盟総体としての同盟内党内闘争として党内闘争を組織化し得ない、いわゆる「コップの中の嵐」に彼らの立場を陥いらせている根拠である。

今日に至るも、未だにただのひとつの分派―党的主体を責任化する部分が出現していない現状であり、ただただ自己をおしゃべりのサロン的フラクにおとしこめている現実を続けているのである。

我々は別に臨総派内党内闘争を公然化せよと言っているのでもなければ、公然機関化を通じて党内闘争を大衆に教訓化できるものとして組織し、階級闘争の中で責任ある党主体―党内闘争を闘えと要求しているのでもない。もとよりそれはもし党主体たらんとするならば当然であろうが、しかし、我々が要請したいのは、臨総派内党内フラクの諸君が、同盟内分派としての我々にあっては、未だに臨総派内の一傾向としてしかその対処がなし得ないという現状を徹底して批判しているのであり、我々は一日も早く同盟内党内―分派闘争を、綱領―路線論争として責任ある闘いに引き上げ、相互を打ち鍛えたいと願っているのである。今日に至るも、臨総派内党内闘争は綱領―路線論争としての位置としては我々とはまったく無関係な位置としてしか存在していないのであり、各フラクの主張すら責任ある形では我々の手元には届いていないのである。我々は各フラクへの対処もはなはだ部分的なそれに留まらざるを得ないのであり、すでに解体した臨総派分派として結局は旧臨総派分派という形で総括せねばならないのである。つまりは党内闘争にならない現状なのである。

（次号つづく）

『赤軍』9号の発刊について

共産主義者同盟
赤軍派日本委員会

今日の党内分派―党派闘争の中で、そして日本―世界階級闘争の中で『赤軍』が発刊される事の占める位置は決定的であるだろう。実に三年半ぶりにこの全国政治新聞が再刊される事自体、我々赤軍派のその間の苦闘を表現するものである。我々が同盟日本委員会を再建し、それをもってしての自らの階級闘争―革命運動の開始、プロ独―革命戦争の闘いとプロレタリア革命派としての同盟の再建を勝ち取る事へ、そして二年有余の同盟内党内―分派闘争を二回総会を巡る最終段階に引きあげるために、我々自身の断固たる大衆化公然化を我々自身の機関紙活動として闘い抜くことを確認し、一方での我々の地下組織体制建設・中央指導部建設、それを通じての革命軍事行動の着手と開戦の闘いのそれぞれの体制と共に、この機関紙発刊の地下体制とその定期刊行化体制を確立するのに我々の全力を挙げ続けてきた。その成果が、今回志・兄弟諸君に届けられた『赤軍』9号である。

全ゆる体制が困難さを併う中で闘い取られねばならないが故、この全国政治新聞としての『赤軍』の再刊第一号も、我々が当初計画していたものとは相当の違いのある、はなはだ不充分なものにしかならなかった。編集の時点それ自体にあっても、一方での敵との攻防による戦闘体制と防衛体制の必要の中で、その労力をさかれ、また我が同盟それ自身の内部での闘いの余韻の影響等として、この機関紙の発刊が日時的にも相当の遅れを出さざるを得なかった。しかし、我々の党建設―党活動の第一の武器であり、プロレタリア人民の闘いの武器であり、そして党内分派―党派闘争の武器でもある党機関紙を発刊し続ける体制を確立する事は、いかに未熟な我々であれ、いや全ゆる意味で未熟であるからこそ尚一層、自己を階級の中で生きた階級実践の中で検証する事は重要であると確認してきたのである。我々は全ての同志・兄弟達の我々自身への同志的批判を相互を打ち鍛える意味でも期待している。我々は地下体制での政治新聞の発刊故、一切の公然たる連絡場所を当面は確立しない。しかし、同志・兄弟達のこの我々の全国政治新聞を通しての批判は様々な形で我々の手元に届くであろうし、その体制こそ真に地下で結合する我々の組織体制であると考えている。

（以下14頁下段に続く）

全党をあげて党建設を闘い抜け！

――綱領―路線確立の深化に向けて――

＜第一回＞

綱領―路線論争を闘い抜くために

党の成長および生命は、を示すものでしかない。党―党員自身の綱領的立場の確立とそれを通じた党そのものの拡大発展であり、そしてその闘いを通じての全ゆる階級闘争の現われを指導し抜く事を媒介に党としての綱領的立場の深化である。党の綱領確立の闘いは、決して単なる文献を駆使しての理論作業のみで勝ち取られるものではなく、党それ自身が主体的に階級闘争―革命運動の中での現実的諸実践を通じてより緻密化深化そして実体化されるのであり、その意味で将に生きた階級実践の反映化されたものである。それ故、我々にとっての綱領確立のための闘いとは、我々自身のひとつひとつの階級実践の検証であり、土台的に確認された綱領的骨格の生きた運動化であり、つまりは党が党として生き続け、闘い続けることそれ自身が、綱領確立のための闘いでもある。いわば諸理論としての定立化はその生きた党の運動の追体験としての総括的位置付けとなるものである。

従って、我々は我々自身の党活動を通じて、我々自身の綱領の真の確立のために闘うのであり、それは党自身の闘いとしての決して一瞬のうちに解決されるものではない。

この立場のうえで、我々は我々の党活動それ自身の中に綱領確立の闘いの長期の闘いを位置付け、その重要な指標として、この機関紙―全国政治新聞を通じての綱領―路線問題に関する種々の方向からの提起を行ない、それを全党的に階級闘争の中で、検証深化させるためにこの「綱領―路線確立の深化に向けて」を連続して一定の綱領確立が全党的になされるまで掲載しつづけるものである。

全党―全党員は綱領―路線闘争を、党の日常活動として闘い抜くこと、それは党の重要な任務のひとつである。

小ブル急進主義の社会的基盤

第一部　今日に於ける小ブル急進主義の発生根拠

第一章　小ブル急進主義の社会的背景

第二章　巨大独占のプロ支配との連関性

第三章　「人的能力開発」に於ける階級支配の強化

第二部　小ブル急進主義の階級的基盤

第一章　ブルジョワ独占との階級的連関

第二章　マルクス主義の小ブル的カリカチュア

第三章　「反スターリン主義」運動の発展的止揚のために ―黒田・梅本の誤謬―

第一節　黒田の「資本主義」批判の矛盾

第二節　黒田「疎外論」の本質

第三節　梅本に於ける「労働力商品化論」～主体性の根拠の破産

第四節　梅本の反唯物論～観念論としての誤謬

〈小ブル急進主義の社会的基盤〉

第二部　小ブル急進主義の階級的基盤

第二章　マルクス主義の小ブル的カリカチュア

……メモ

マルクス主義が登場し資本主義の生産関係と階級関係を明確に規定し、階級闘争の原理的基盤を確立して以降、資本主義との闘いを試みる者はこのマルクス主義的意義を無視しては闘争を位置付けえず、したがって、全ゆる小ブル主義も今日に於いては少なからず、このマルクスの衣をかぶってしか登場し得ない。それればかりか積極的にマルクス主義の正統派を任じて、マルクスの言葉を充分に利用しつつ、しかし注意深く、マルクス主義の基本を抜き去り、それを歪曲させ、自己の姿に似せてその世界を変えてしまう。したがって、今日に於いて、小ブル急進主義を論理的に支えるのは、決してブルジョア的あるいは小ブル的論理形態そのものではなく、(かつてのショウペンハウエルやニーチェやあるいはシュテルナーおよびプハードン等の純粋観念主義は、そのままで生き残るのではなく、形を変えて)プロレタリアートの要求を代表する形態を取って表われる。意識的、無意識的にせよ、このマルクス主義の歪曲が、今日に於いてプロレタリアートの発展、小ブル階級のそれへの止揚の階級的課題を妨げている事は明らかである。小ブル急進主義の論理的背景を把握する事と、その止揚のために今日の「新左翼」として表われている、小ブル急進主義からプロレタリアートの運動への過渡的位置を規定化させ、かつはもっとも戦闘的、革命的であったが、今や我々の大きな桎梏となっている、特徴的イデオロギーを分析して、我々の小ブル克服のイデオロギー的課題を探求する糸口としたい。

「ハンガリー動乱を反革命として評価すべきか、それとも革命として評価すべきか。だからハンガリー事件がまきおこらなければならなかった根源はどこにあるか―こういう問題は、さしあたりまず、どうでもよいことである。なによりもまず第一に我々の念頭におかなければならない事が、ただ一つだけある。それは何か？　いうまでもなくハンガリーの全民衆にかってソ連軍が発砲したということだ」（「現代における平和と革命」黒田寛一）「ハンガリー事件」という決定的事態が、日本における反スタ運動の萌芽となり、日共修正主義集団の歴史的「転換」の中で、それは日共を否定した新たな革命党建設の基本的第一歩とならざるを得なかった。今日に於ける「新左翼」運動を多かれ少なかれ位置付けたのはこの素朴な「反スターリン」の意識であった事は否定しがたい。だが今日、この「反スターリン裏切り史観」そのものが歴史的限界性を有している事、あるいは更に言えば、スターリンを単なる歴史と偶然とし、ソヴェトとプロレタリア独裁、そして社会主義化のベクトルとそれを分離させて「ソ連論」あるいは「修正主義論」を語る事は決定的に誤謬性を内包している。反スタ運動はすでに十余年、このスターリン批判さえ風化し、フルシチョフの20回大会での「スターリン批判」以上に出ないというこの現実は、この「反スタ主義」の軸なる「スターリン批判」さえ形骸化させているのではないだろうか。

今、スターリン主義の論理的批判を再度明確にさせる事、あるいは「反スタ運動」そのものの限界性を措定する事、それは革命党建設の綱領的課題としては重要であると同時に、ソ連公式発表でさえ三〇〇万人、一般には一〇〇〇万と呼ばれる粛清の犠牲者。オールドボルシェヴィキの八〇％を抹殺したこの粛清に、現在に於いていかに答えるか。我々もまたこの「粛清」の現実から無縁ではなく、また日本の「反スタ運動」も無縁ではなく、更には、毛沢東、金日成もこの歴史の血の上にあるという事を踏えるなら、我々がこの「粛清」をいわゆる階級闘争の一要素として、党派闘争の一形態として認めるか否かが問われていると言えよう。この現実的危機感～認識を有しつつ、以下の反スタ運動のイデオロギー的分析を展開したい。一見この無関係に見えるベクトルを、我々はもう一度反スタ運動の考察を進め、小ブル急進主義を明確にして行くなかで、「スターリン主義」そのものを把えてみたい。毛沢東主義という形で、マルクスの最高の次元を安易に合理化し、またスターリン批判そのものを否定し、今日のソ連修正主義～小ブル社会主義が、フルシチョフ以降にあるのだという、度し難い論理さえ公然とまかり通っている今、この事を心に止めておくのも無駄ではない。「反スタ運動」の止揚に、この事をどうしても内包しておきたいと思うのである。

「未来の世代の党指導者よ、私は諸君に呼びかける。この恐しい日々のあいだに次第に大がかりなものとなり、火のように燃えひろがって、党を窒息せしめようとしている罪悪が、かくものすごく絡まりあっているのを解きほぐす義務が、この未来の世代の歴史的任務のなかに含まれることであろう。あらゆる党員に、私は呼びかける。」

「同志たちよ、知ってくれたまえ。諸君が共産主義への勝利の行進のあいだ、押立ててゆく旗には私の血の小さな一滴が宿っているであろう、ということを。」（『ブハーリンの遺書』（「ブハーリン裁判」））

誤りには許される事と許されない事がある……

第三章　「反スターリン主義」運動の発展的止揚のために ―― 黒田・梅本の誤謬 ――

第一節　黒田の「資本主義」批判の矛盾

① 「資本制生産様式の本質的な矛盾は賃労働と資本との矛盾的自己同一にある……。いいかえれば、労働力の商品化をば資本の反省規定として本質論的にとらえるという事である。」「若きマルクスは、その『賃労働と資本』において、『賃労働なしには資本はない』と言えよう。今日の現実的危機感～認識を有しつつ、以下の反スタ運動のイデオロギー的分析を展開したい。一見この無関係に見えるベクトルを、我々はもう一度反スタ運動の考察を進め、小ブル急進主義を明確にして行くなかで、「スターリン主義」そのものを把えてみたい。毛沢東主義という形で、マルクスの最高の次元を安易に合理化し、またスターリン批判そのものを否定し、今日のソ連修正主義～小ブル社会主義が、フルシチョフ以降にあるのだという、度し難い論理さえ公然とまかり通っている今、この事を心に止めておくのも無駄ではない。「反スタ運動」の止揚に、この事をどうしても内包しておきたいと思うのである。

「未来の世代の党指導者よ、私は諸君に呼びかける。この恐しい日々のあいだに次第に大がかりなものとなり、火のように燃えひろがって、党を窒息せしめようとしている罪悪が、かくものすごく絡まりあっているのを解きほぐす義務が、この未来の世代の歴史的任務のなかに含まれることであろう。あらゆる党員に、私は呼びかける。」

「同志たちよ、知ってくれたまえ。諸君が共産主義への勝利の行進のあいだ、押立ててゆく旗には私の血の小さな一滴が宿っているであろう、ということを。」（『ブハーリンの遺書』（「ブハーリン裁判」））

誤りには許される事と許されない事がある……

の確認であり、それは、「プロレタリアートの歴史的自覚の対象化形態」としての意義を有し、それを媒介として、「賃労働と資本との矛盾的自己同一（反省関係）」の「自同一（反省関係）」の「自覚」によって、「階級的自覚」が形成される、と資本の反省規定として本質論的にとらえるという事である。」「若きマルクスは、その『賃労働と資本』において、『賃労働なしには資本はない』……マルクスがとらえていた事を端的にしめすものである」（「資本論以後一〇〇年」黒田）　黒田は、「賃労働と資本との矛盾的同一」に、資本主義商品生産の基本矛盾の全てがあると規定する。これを「本質」とする。および「労働力商品」が『資本論』の基本命題であり、その展開は、賃労働者の「自己内反省」としての「労働力商品」の矛盾から、調和、安定の側面を示したものであり、それ自体は抽象的対立をしか示さない。それは事物の相対的静止という不可欠の条件を示しているが、それは矛盾の一構成要素にすぎない。

③ 賃労働の反省規定としての資本は、単なる形式的規定にすぎず、生産の直接的目的としての剰余価値の生産、剰余価値を求める欲望の、自己本性を捨象したものでしかない。資本の生産力として、表現される労働の社会的生産力の槓杆こそ、この資本の本性として表われるものであり、それは同時にこの社会的生産力の無条件的発展と衝突する、資本主義的生産様式の真の制限である。

④ すなわち、この事をマルクスは「資本主義的生産の真の制限は、資本そのものである。というのは、資本とその自己増殖が生産の出発点および終結点、動機と目的として現われるということである。……手段―社会的生産力の無条件的発展―が、現存資本の増殖という制限された目的とたえず衝突せざるを得ない」（「資本論」マルクス）

……

資本主義的生産様式の矛盾を表現するこの事は、一方で、貧困、抑圧、搾取の度合いを増大させるとともに、労働者階級を訓練し、結合させ、その反逆を増大させる。

⑤ 黒田は次にレーニンの「プロレタリアートの自然発生性は、そのままでは社会主義革命としての階級意識に発展する事はない」という命題を悪無限的に拡大させる。プロはその危機意識が自然発生的であるかぎり、↖

↙「どの様な方向へ展開しまたすべり落ちて行くかわからない」（「現代に於ける平和と革命」）それはとりわけ、ブルとスタの相互支配の今日にあっては危機的であり、この中にあってプロはブルの階級支配に「やすやすと利用されてゆく」のであり、イデオロギー的にも思考力そのものを敵に奪われ「人間的堕落と破滅へつき進む道しか残されていない」と規定される。同時に他方、危機を打開するための「目的やイデーへと結晶化して」ないのではない。逆にそゆく点でこのプロの危機意識を重視する。この点ではプロレタリアートと小ブルの区別も一切明確ではなく、区別はその地平においては、労働に於ける「疎外」の度合でしかない。したがって、プロは「疎外された労働」の中にあって、単に、自己を肉体的に「苦しめ」精神的に「荒廃」させるのみであり、それ故「物化された人間」「非人間的な生存そのもの」とプロか規定される。そこでだからこそ資本家はプロへ「虚偽意識を注入し」「資本主義のきずなにつなぎとめ」るために、「全ゆる手段」を精神的肉体的、経済的につくす。「まさしくこの故に労働者たちは直接には階級意識をもちえない状態にある。」というのである。

⑥ レーニンは原始的な闘争としての闘争という、より、はるかに絶望と復讐心との現われであっても、目的意識性の萌芽を認め、その中に秘められ、また外化、爆発しようとする プロレタリアート～勤労人民の革命的積極性の過少評価を批判している。またレーニンがロシアにおいて規定していたのは、特に社会民主党の指導が、大衆の自然発生的覚醒に比べ、それを指導するには相当の立ち遅れがあるという状況に規定されての視点である。

⑦ 黒田の言うように、プロが「強制労働」であり、また「非人間的生存」であるから、プロレタリアートそのものが、自然発生的に社会主義的革命性、革命的積極性を有しないのであり、逆にそのの階級矛盾は、階級視点の基軸でさえあり、決して発展意識を「疎外」するものではない。それはレーニンの言う、第一にはブルショア・イデオロギーが全面的に完成（プル的に）され、多くの普及手段を有している事。第二には、階級的意識の獲得が労働者と個々の資本家との関係の外部、したがって、全ての階級の相互関係の領域からであることと規定されて、階級的自覚は自然発生的に社会主義へと発展しないのであり、ここに党の「外部注入」の必要性があり、また社会主義への「助産婦」たる革命が必要となるのである。

⑧ 黒田の規定に従えば、プロレタリアートは、現実の階級矛盾の中では、「自然発生的」に、それ故必然的に革命とは正反対の逆の反動的方向に、物質基盤＝「疎外労働」に規定されて進むのであり、益々プロレタリアートの階級性を喪失する事でしかない。しかしこれでは黒田の言う「自然発生的プロレタリアートの決起」は存在しない事になる。資本主義体制下で、社会主義革命の発生するのである。それはまったくのプロレタリアートへの侮蔑以外の何ものでもない。

この、プロへの階級への本質的侮蔑、人間蔑視の感情が、単にプロを党の手段、組織工作の媒介としてしか規定しない転倒が生まれ、人間の意識を物理的「外部注入」でもって変革しようという「自己批判」→「テロ・リンチ」の思想が生まれるのである。これは、スターリンのとった手段と、まったく異なるところはない。「反スタ主義」の帰結がスターリン主義の裏返しでしかないという根拠はここにあるのである。

第二節　黒田「疎外論」の本質

① マルクスは『経済学・哲学手稿』に於いて、ひとつの国民学的事実から発展させて、この事実を「疎外された労働」と表現し、この概念を分析してその諸側面を示した。

② 「疎外された労働」のそれ自身との矛盾」として、労働は生産物の創造であるかぎり労働の対象化であるが、資本主義的社会形態に於いては、同時に「疎外」の形態を取るという事を明らかにし、「私的所有」が「疎外された労働」の所産、結果であると結論した。つまりこの事は、資本の形成が生産過程のうちにある事を明確にしたのであり、他方この過程の科学的分析は、労働過程で外された労働」の「疎外」論を媒介にして、マルクス主義の全体を、現象的・感性的な「直観」で取って変えるものである。

③ 「歴史的には原始共同体に於ける諸成員、論理的には人間生活の社会的生産の本質的形態の担い手たる人間―これを人間の本来の人間的姿（人間的本質）として自覚し、それが、自己の現実の疎外された人間と原始共同体における疎外されざる人間との対立が自覚され、かつその止揚の主体的根拠がかたちづくられるのである」（「マルクス主義の形成の論理」）マルクスが『ドイツ・イデオロギー』等で徹底的に批判した「人間的本質」なる超観念的なウクライドを、（これこそ将にヘーゲル新派の主張に他ならないが）堂々と提出して来て、「疎外」の現実と対立する点の「自覚」を「止揚」＝革命の「主体的根拠」とするのである。

「疎外」を「自覚」しその「止揚の主体的根拠」を位置付けるためには、黒田にとっては、どうしてもこの「人間的本質」という「イデー」をわざわざ持ち出して来なければならないのである。

④ 近代的大工業として、社会主義の物質的前提が現存しており、したがって、それを基盤として、社会主義革命の革命的性格を有した、いわゆる未来と現在への豊かな「人間的」要求が、当の「疎外された」人々のうちに生き生きと現存している事、この事をプロへの蔑視の中で措定し得ない、黒田は、「原始共同体の諸成員」等の超観念的に決して現実の、今日の資本主義社会に於いては存在し得ない、夢の「イデー」を持ち出し、その主観的な観念論的な「止揚の主体的根拠」を説明しなければならない。

⑤ 「社会主義を前提するなら人間的諸要求の豊かさはどの様な意義を持っているか」とマルクは先の『経済学・哲学手稿』で論じている。と同時に、感情・情念が、盲目的・非合理的ではなく、その内部には理論的要素を内包している事を、感性の唯物論的見地から述べている。そして「感覚は、その実践において直接に理論家となっている」と述べる。すなわちこの事は何を示すのか。物質的豊かさへの欲望の増大、他方、労働の自立、責任感、あるいは知識、学問への希求を熱烈なものにさせ、労働のエネルギーまたそれへの要求を増大させ、人格の全面的発達等々……を資本主義の発展は促すのであり、単にそれは、資本主義体制下の人間の情念を「疎外」し、人間の本来的「要求」を妨げるだけではない。そうであるが故に、逆に今日の資本主義の下では豊かな人間的生活、社会への志向が人間的本来的要求が、その発展を極限化させる事において、自ら生まれた基盤そのもの＝資本主義への否定を生じさせるし、その事が、つまりは「疎外」をその直接的感性として発生させるのである。したがってその事は「疎外」という感性的自覚が、プロレタリアートの階級的自覚を自然発生的に登場させるのではなく、資本主義の発達、商品生産の発展の社会的生産基盤そのものが、生産と生産関係の矛盾を媒介に、プロレタリアートの更なる社会的発展へ止揚を生じさせるのであり、すなわちこの事が、資本主義から社会主義への必然的移行を規定するものである。観念的・感性的自覚を、階級的意識の、階級的団結の基軸にする事は、まったくの社会主義の階級的社会的基盤を否定する。「人間的諸要求の豊かさ」こそが、プロレタリアートを資本主義の科学的把握、社会主義への必然的移行の確信に導き、プロレタリアートが資本主義に対する闘争で勝利する事を可能にするのである。

⑥ 黒田は、「疎外」の根拠、原因を空虚で盲目的な疎外の自己感情に置き、プロレタリアートの社会的基盤から生じる生活的要求の発展性を否定する。この事は、感性と対象的現実との関係の逆転から導き出される。すなわち、黒田は感情、情念の自己感性のあり方を「疎外」の現実的根拠とする事で、現実の社会的諸関係を科学的に把握する事を捨象し、「疎外」感、自己喪失感を悪無限的に深化・拡大させ、その事で「人間的諸要求の豊かさ」を衰弱させ、外部からもち込まれた、直観的で空疎な「イデー」表象で置きかえるのである。彼の言う、プロレタリアートの「主体性」を「本質」とは、この様な実存的な観念の先鋭化した「主体性」、小ブル的な観念の先行でしかない。

⑦ 黒田の「疎外」論は更に発展する。彼は、労働そのものが「労働者にとって外的なもの、苦痛なもの、強制的なものとなるという関係」、労働それ自身の自己疎外（労働の苦痛化）および分割＝崎型化）が「疎外の本質的根拠」としての『疎外された労働』」であるとされ、生産物からの「疎外」はその直接的な結果現象であるとする。この事は更に「非人間性の感性的表現」（機械的単調化・分業による崎型的専門化）が、いわゆる「本質論」的問題であり、「低賃金と失業の事実」は「現実論」的問題にすぎないと発展される。（マルクス主義の形成の論理」）

黒田によれば「労働の苦痛化」「非人間性の感性的表現」が、すなわち労働に於けるプロの感情、情念のあり方それ自身が「疎外の本質的根拠」とされる。実に独自的であるが、マルクスは、労働の中で自己を肯定せず、否定し、快く感じず、不幸と感じる事、すなわち労働が要求の充足ではなく強制的である事、その物質的根拠が「疎外の本質的根拠」であるとしている。『経済学、哲学手稿』を読めば判るはずだ。黒田の言う「疎外」がプロレタリアートの頭の中に自己感情にその「根拠」を持つというのと、似ても似つかぬ。主観的な観念論、主情主義である事は明確である。以下その証明……

⑨ 本来的に要求、情熱個の中に於いて「対象的存在が支配し、私の本質的活動が感性的に激発する事」（『経済学、哲学手稿』）であり、人間の感性、情念は無対象的で自己完結しているのではなく、感性から独立の対象の存在、そのあり方に根本的に条件付けられ、制約されている。マルクスは、この事を唯物論、反映論の立場から、更に情念の諸対象が人間の労働、産業の産物であり、それ故、社会的関係に制約されたあり方で存在する事を考察していた。すなわち、感性・情念が生産力の発展水準、社会的諸関係に規定される事を明確にした。労働が資本のもとに包摂され、労働過程が同時に価値増殖過程であるから、労働の内部で情念が肯定されず、人間的本来的要求が、非人間的なものにおとしめられ、感性がその結果として「疎外」されるのである。これをまったく転倒・逆転させて、情念から社会関係を規定し、導き出そうとしているのが黒田の「マルクス主義」「疎外」論である。

―黒田批判メモ①

未完―

⑧ マルクスは、労働の中で自己を肯定せず、否定し、快く感じず、不幸と感じる事、すなわち労働が要求の充足ではなく強制的である事、その物質的根拠が「疎外の本質的根拠」であるとしている。『経済学、哲学手稿』を読めば判るはずだ。黒田の言う「疎外」がプロレタリアートの頭の中に自己感情にその「根拠」を持つというのと、似ても似つかぬ。主観的な観念論、主情主義である事は明確である。以下その証明……

⑨ 本来的に要求、情熱個の中に於いて「対象的存在が支配し、私の本質的活動が感性的に激発する事」（『経済学、哲学手稿』）であり、人間の感性、情念は無対象的で自己完結しているのではなく、感性から独立の対象の存在、そのあり方に根本的に条件付けられ、制約されている。マルクスは、この事を唯物論、反映論の立場から、更に情念の諸対象が人間の労働、産業の産物であり、それ故、社会的関係に制約されたあり方で存在する事を考察していた。すなわち、感性・情念が生産力の発展水準、社会的諸関係に規定される事を明確にした。労働が資本のもとに包摂され、労働過程が同時に価値増殖過程であるから、労働の内部で情念が肯定されず、人間的本来的要求が、非人間的なものにおとしめられ、感性がその結果として「疎外」されるのである。これをまったく転倒・逆転させて、情念から社会関係を規定し、導き出そうとしているのが黒田の「マルクス主義」「疎外」論である。

―黒田批判メモ①

未完―

宣戦布告—世界革命戦争

戦争宣言

戦争宣言

一九六九・九・四

ブルジョアジー諸君!!

我々は、君達を世界中で革命戦争の場に叩き込んで一掃するために、ここに、公然と宣戦を布告するものである。

ブルジョアジー諸君!!

君達が、たとえ、米軍、NATO軍、安保軍、ベトナム連合軍、等々、全世界の軍隊や、全世界の警察を総動員しようとも又、君達が骨抜にし変質させたソ連—ワルシャワ軍までをも動員したとしても我々は、全世界のプロレタリア人民の力を世界党—世界赤軍—世界革命戦線の下に結集し、必ずや叩きのめしてしまうことを通告する。

君達の歴史的罪状は、もう、わかりすぎているのだ。君達の歴史は血塗られた歴史である。第一次大戦。第二次大戦。君達同士の間での世界的強盗戦争のために、我々の仲間をだまして動員し、互いに殺しあわせ、あげくの果ては、がっぽりともうけているのだ。

君達は、植民地を略奪するために、我々の仲間を殺した。仲間をそそのかし、植民地を略奪したら、そのわけまえをやるといって、後進国の仲間を、君達がそそのかした仲間をつかって殺させたのだ。それだけではない。そうやって略奪した植民地を、君達同士で奪いあうための強盗戦争にも、同じように仲間をそそのかし、殺し合わせたのだ。

我が、日本のブルジョア諸君!! 君達にもうそとは言わせない。富国強兵のスローガンのもと、日清、日露、第一次、二次の強盗戦争をやって来たではないか。

我々は、もう、そそのかされ、だまされはしない。否。そそのかされ、だまされないだけではない。我々は、過去のうらみを持って君達を呪うと共に、またまた君達がやろうとしていることに対して、今度は我々の側には用意がある。

君達に、ベトナムの仲間を好き勝手に殺す権利があるのなら、我々にも、君達を好き勝手に殺す権利がある。

君達に、ブラック・パンサーの同志を殺害し、ゲットーを戦車で押しつぶす権利があるのなら、我々にも、ニクソン、佐藤、キージンガー、ドゴール等々を殺し、ペンタゴン、防衛庁、警視庁、君達の家々を爆弾で爆破する権利がある。

君達に、沖縄の同志を銃剣で突き刺す権利があるのなら、我々にも君達を銃剣で突き刺す権利がある。

君達が、朝鮮で再び戦争をやるために、自衛隊を増やし、フォーカス・レチナや、三矢作戦をやり、朴独裁三選のため、それに反対する任君を逮捕し、死刑にする権利があるのなら、我々にも、赤軍を作り、革命戦線を作り、君達を逮捕し、死刑にする権利がある。

アメリカのブルジョア諸君!! 君達は、第二次大戦後、朝鮮で、コンゴで、ベトナムで、不断に仲間を殺し続けて来てくれた。日本のブルジョア諸君!! 君達は、自衛隊、機動隊を増やし、今、ベトナムに協力し、朝鮮に将来派兵しようとしている。西独のブルジョア諸君!! 国防軍を強化しフランスを牽制し、チェコや、東欧や、中近東に目を光らせて、何をしようというのだ。

ブルジョアジー諸君!! いつまでも、君達の思い通りになると思っていたら、大まちがいだ。我々は、過去、封建領主のもとでは家畜のように領土のおりの中に縛りつけられた農奴だった。君達は、この身分の枠を破り、我々を、君達の自由にするために「自由、平等、博愛」のスローガンの下、領主たちと闘った。だがいまや、我々は君達の好き勝手にされる事を公然と、きっぱりと拒否することを宣言する。もう、君達の時代は終りなのだ。我々は、地球上から階級戦争をなくすための、最後の戦争のために、即ち世界革命戦争の勝利のために、君達をこの世から抹殺するために、最後まで闘い抜く。

我々は、自衛隊、機動隊、米軍諸君に、公然と銃をむける。君達は、殺されるのがいやなら、そのの銃を後ろに向けたまえ! 君達をそそのかし、後ろであやつっているブルジョアジーに向けて。

我々、世界プロレタリアートの解放の事業に、邪魔するやつは、だれでも、ようしゃなくやっつけ、革命戦争の真只中で抹殺するだろう。

万国のプロレタリア団結せよ!

世界革命戦争の宣戦をここに発するものである。

敵に銃を向けよ!

一九七四・九・四

ブルジョアジー諸君!

我々は五年前、君達に公然と宣戦を布告した。以降、今日まで、君達ブルジョアジー諸君とのたえまない戦闘が続いている。我々の革命戦争は人類史、最后の戦争であり、戦争を永遠に葬り去るための戦争である。革命戦争は、我々があえて宣戦を布告するまでもなく、常にあらゆる戦争がそうであるように、すでに全世界のいたるところで開始されている、政治的・社会的闘争の持続したものにすぎず、政治・社会闘争の部分、延長であり、全世界プロレタリアート、被抑圧人民の手によって、全ゆる形態を取りながら資本主義の廃止とブルジョアジー諸君の絶滅に向けて闘われてきた。そして君達がいかに嘆こうとも君達の絶滅が完了するまで、この戦争は終わる事はないし、全世界のプロレタリアート・人民の手に、この全世界が握れるまでは、この君達に対する糾責ない戦闘、君達へ向けられた我々の銃口からの硝煙が絶える事はないのだ。

君達がいかなる弾圧・抹殺の攻撃をくり返そうとも、我々を根だやしにする事はできない。我々つまり全世界プロレタリアート・人民を全員抹殺する事は君達にはできないのだ。なぜなら、我々の存在によって君達の存在基盤は成立しており、生産基盤に於いて君達を生かしておいてやっているのは、我々の労働力であるからだ。君達は、我々を殺す事はできない。唯一、我々を搾取し、抑圧し続ける事によっての み君達の生存がある。従って、我々を抹殺する事のできない君達と、君達を絶滅する事のできる、そのための闘いに全ての生存を賭けている我々との、この戦争にあって、すでに初めから君達の敗戦は決まっているのだ。

我々は、ここに、君達ブルジョアジー諸君に対する宣戦布告—再度の戦争宣言を発すると同時に君達の降服を勧告する。君達の降服が一日でも早ければ早い程、我々の戦争の被害は軽量ですむし、また君達の、真の人間的復活、人民の一人として生きる事の可能性も大きくなるのだ。我々の戦争は、決して今日の世界の、発達した生産関係、そのものを解体し尽すものではない。我々の戦争とその勝利が、資本主義という、我々自身プロレタリアート自身を拡大させ、発展させ、成長させ、そして自らの力でもって我々自身が組織する事、団結する事、同じ労働の中での、増々の単一階級としての自覚と、現実を、我々自身の成長として導き出した、この資本主義を、我々の時代、社会主義の生みの親として確認しているし、この資本主義の中での生産関係の発展そのものが、一方で我々自身を拡大、組織する事に於いて、他方その生産関係と我々生産力との矛盾の中で、ブルジョアジー自身、それを維持できない事に於いて、我々の戦争、革命戦争、社会主義革命戦争の勝利の根幹であると確認している。

我々は、ただ、この生産関係を、真の任い手たる我々、プロレタリアートの手にブルジョアジー君達から奪い返すだけであり、その事でこの発展を真の人間的発展として社会主義・共産主義の中で確立していくだけだ。従って、君達に対しても、その君達の能力、労働力、人間としての最大の喜び、生存の根拠たる、人間労働を、社会主義・共産主義へ向けた発展の中で有効化しうるし、止揚できると確信している。

我々は、諸君が一日も早く、非人間的な野蛮で残虐な、資本主義というメカニックから自己を解放するために闘う事、プロレタリアートの一員として自己を復権する事、そして今度は君達のかつての仲間自身に、銃を向ける事、この事を要請する。我々は、君達に対しても、その再生・更生のための努力をなす用意がある。君達の人間としての解放のために一緒に闘う用意がある。

ブルジョアジー諸君!

およびその同盟者達!

ブルジョアジー・国家権力を握る政治家官僚、警察、軍事官僚、および権力に奉仕する行政官僚役人、下級軍人、警察官、司法審査—裁判官、そして買収されたひとにぎりの労働者—組合官僚、社民、社帝の労働者活動家達、そして、その他一切の権力に迎合する小ブルインテリ、知識人たち!

君達に対する、我々の戦争は君達の人間的抹殺までも要求はしない。しかし、君達が資本主義体制を支える機構に存在する限り、君達の完全なる絶滅をも追求せざるを得ない。我々は、従って、決して君達が進んで自らの支配の立場を退りぞきはしないという事を歴史の中でよくよく知っていながら、しかし、あえて君達に対して歴史の最良の道を選ぶよう勧告するのである。

全ての人間にとって、唯一の歴史的前進の道は、「ブルジョアジーに銃口を向けよ」である。唯一の解放の道はこれしかないのである。

ブルジョアジー諸君!

我々の戦争は、君達の敗北に終わるしかない。歴史はその結論に向って一目散に進んでいる。

全ての抑圧され、搾取され、差別されているプロレタリアート・人民、兄弟達! 我が階級的同胞達! 我々の真の解放に向けて、銃を取れ!

全ゆる武器を用いてブルジョアジーを絶滅せよ。兄弟、同胞の存在するその地平でのブルジョアジーに対する総叛乱を開始せよ。全ゆる武器を奪取せよ。全ゆる機械を自主管理せよ。ブルジョアジー・国家権力の一切の機関・機構を破壊し、略奪し自らの武器に転ぜよ。

今日の資本主義体制が犯罪とする、私有財産維持への攻撃、敵対の全ては、資本主義体制を粉砕する意味に於いて歴史的に「無罪」である。一切の「犯罪者」は、それ故、「無罪」であり、我々の同胞である。今日の牢獄にとらわれている者の中に、一人でも真のブルジョアジーの側に立つ者が存在しているか。権力犯罪でもって囚われたブルジョアジーが一人でもいるか。全て、資本主義体制に対して結局反抗した者への、権力による解答が今日の牢獄なのである。全ての「犯罪者」は我が同胞であり、我々は、全ての「犯罪者」を我々の手で解放せねばならない。監獄を「革命の根拠地」に転嫁せねばならない。

今日、ブルジョアジーによって「犯罪」と烙印されたものは、階級と歴史の名に於いて「無罪」であり、それが資本主義体制への攻撃である限りにおいて、我々は断固としてそれを承認せねばならない。ブルジョアジーに対する、総叛乱の中に於いてこそ、この中での矛盾は止揚、克服されるのである。

ブルジョアジーの一切の物、私有財産を略奪せよ! 破壊せよ! 奪い、壊し、そして創りかえよ!

ブルジョアジーの私有財産制に対する、全ての「犯罪」は、我々の名に於いて承認される。

全ての兄弟、同胞達! 我々の合言葉は、「ブルジョアジーに銃を向けよ!」である。

全ゆる手段、全ゆる形態での戦争を組織せよ!

革命軍—赤軍に結集・参加せよ!

革命戦争に勝利せよ!

全ゆる無数の戦争が、目に見えぬ赤い革命の糸によって結びあわされ、革命戦争の勝利への前進が勝ち取られ、赤軍の建設が勝利する。

戦争を開始せよ!

銃を取れ!

敵に銃を向けよ!

ブルジョアジー諸君!

我々は君達を絶滅するために生まれ、ここにやってきた。

ブルジョアジー諸君!

君達を絶滅させる最后の戦争を我々は闘う!

我々は、

戦争を宣言する!

共産主義者同盟赤軍派（日本委員会）

第二回総会組織委員会　結成宣言

全ての同志諸君、兄弟達！ 今ここに我々は、同盟再建の輝しき第一歩が開始された事を宣言する！ 第二回総会へ向けた大胆な前進が開始されたのだ！ 一切の党内―分派闘争は最終段階に到達した！ 我々はその事を同盟第二回総会組織委員会（二回OC）が結成された事をもって断言しうるのだ！ 同志、兄弟達、闘いの地平を踏え、我が赤軍派に結集せよ！

連合赤軍敗北以降の様々な闘いと、その限界性、敗北を確認しうる地平への到達の中で、我々は、我々自身のサークル性、手工業性、総体の解党主義を自から自身の内包した経済主義、組合主義、すなわち帝国主義ブルジョアジーとの権力闘争を恐怖し、逃亡する一切の日和見主義、合法主義を同時に組織教条主義―カウツキー中央派をも粉砕する事を通して、自から自身の内部で解体し、革命的に克服するその闘いを勝ち取った。我々は、我々自身の敗北の自己切開と内的闘争―党内闘争を通して、我々自身が党建設の主体たりうるべき新たな地平を獲得したのである。党内闘争の中での「総括を！」という一般的地平のみで我々の闘いを制限化する傾向を、すなわち今日までの「ぬるま湯」に野合プラクとしてつかりきるその地平へひきもどそうとするその方向を断じて拒否する。

我々の団結は、闘いの共有と、路線の一致と、組織的共同、すなわち綱領―路線的結合以外あり得ない。我々は、その団結がいかに日本（世界）階級闘争の中で、微々たるものであったとしても、その地平を光栄に思うし、その事に固執するのだ！ 同盟臨総派―反臨総派を問わず、この数年間の党建設と革命運動での敗北を、我々は、この二回総会をめぐる闘いと、その着実な組織実践の中で止揚するのだ！ 我々は一般的な党建設に敗北したのではない。我々は確実に革命運動に将にプロ独樹立―世界革命戦争の闘いにこそ敗北したのだ！

だが、その敗北―自己解体の中で、我々は確実な前進への第一歩を今、ここに二回OCを結成する事で勝ち取ったのだ。

同志、兄弟達！ 同胞達！ 我が、共産主義者同盟赤軍派日本委員会に結集せよ！

同盟。党内―分派闘争と我々

同盟第二回総会に勝利せよ！

我々は自らが、明確な組織的実体として自己の階級闘争、革命運動を主体的に闘う事、すなわち、一切の民主主義諸闘争―大衆運動、労働闘争に、その内部で党を建設する事を通じ、それら一切の階級闘争の現われをその先頭で闘い、その闘争を革命的に領導・指導し抜き、その中で、しかしそれらのいわゆる即時的なプロレタリアート・人民の闘争、その自然発生性が、生産関係の止揚、所有と労働の分離の廃絶、私的所有の廃止と生産関係の社会的共有、総してプロレタリアートの賃金奴隷制、経済的従属を打破し、プロレタリアートの社会、「能力に応じた労働、必要に応じた分配」という共産主義社会を建設しない限り、すなわち、プロレタリアート・人民の経済的解放を勝ち取らない限りその真の勝利はない事、それへ向けて、過渡に於けるプロレタリアートの独裁権力を勝ち取り、社会主義建設をそのプロ独を軸に押し進める事、この将に社会主義革命を、世界的同質性として、今日の過渡期世界にあっては、世界同時革命、社会主義革命として闘う事、その中に民族解放、被抑圧人民の解放のそれら諸階層、諸階級の闘争を全人民の政治闘争として包摂する事、このプロレタリアへゲモニーのもとでの全人民の政治闘争を、プロ独樹立へ向けたプロ独運動として闘う事、即ち世界プロ独へ向けた世界プロ独運動として闘う事、この陣型、形態を帝国主義ブルジョアジーの侵略・反革命―差別分断支配攻撃の軍事抑圧・弾圧体制を打ち破る革命戦争・世界革命戦争として組織し、勝利しなければならず、このプロ独の一切の政治闘争、権力闘争の環であり、内実であり、これらの事を現実に勝ち取らない限り、真のプロレタリアート・人民の階級的解放はあり得ないのだと言う事を指し示し、その目的意識的な共産主義運動へと一切〈の階級闘争を止揚、結合させる事、この事を明確な革命的行動―軍事行動として貫き、端初期に於ける遊撃戦―ゲリラを闘い抜き、全国―全世界に、この革命戦争の中枢、非合法中央集権、職革、軍事組織の党を建設する事、その環に党の武装、全人民の武装、革命軍建設を勝ち取り、全ゆる闘争、政治大衆スト、デモンストレーション、暴動、そしてゲリラを単一の革命戦争へと結合・止揚させ統一化する事、このいわば民主主義諸闘争―政策阻止、反権力闘争～賃金・経済闘争～解放闘争を共産主義運動へと高める闘いを組織として戦略的、戦術的、そして組織的に主体化して闘う事、この革命実践こそが、今日もっとも要求されていると確認している。

この主体的運動を内実化する事に於いてのみ、我々の党派闘争―党内・分派闘争の党建設の闘いが実体化されるのである。この事を確認せず、十年一日の如く、党内闘争―分派闘争を、死んだおしゃべりとサロン会議で進める事の階級闘争とは一切無関係であるその犯罪性を確認せねばならない。

我々は、自身を主体化させる事を通じて、自己の党内―分派闘争―党派闘争にその一切の責任を持つ。おしゃべりやサロン会議では、今も存在する左派フラク・分派も、この二年間の階級闘争の中での敗北から、その混迷と止揚の道を模索している。我々、共産主義者同盟赤軍派（日本委員会）は、この状況下で、我々自身の党建設、革命運動の実践を、他方での同盟内党内闘争の勝利的遂行―同盟二回総会の勝利的開催をその重要な環として確認している。

我々の再建は、我々が主要に進めてきた、同盟内最大分派、最右派たる臨総派の解体、止揚、再編であり、反臨総派―左派分派、諸グループ、フラクの再編、統合であった。我々は、ここにその闘いの一定の勝利を宣言しうる。もとより、この間の闘いの中で、我々のあまりの微力さと限界は何度も露呈されたが、しかし、なによりも再度、この階級闘争で赤軍―赤軍派を生きづかせようというその一点でもって我々の闘いの前進はあった。

我々は、今日に於ける唯一の同盟実体であると主体的に確認するし、それはいかに微力ではあれ、連合赤軍―同盟敗北以降の同盟内諸分派、フラク乱立のその部分を、現実組織的にも、臨総派分派をも含め、ほぼ統合している事に於いてもそう確認するのである。しかし我々は現在的に、同盟内―党内分派闘争の結着こそ同盟第二回総会の勝利的開催であると確認し、今日に於いては、未だ同盟内党内闘争がその最終段階を迎えていないと確認する事に於いて、（確かにたとえば、最大分派―臨総派は分解させ、また他分派、フラクをも含め、我々の路線的一致のもとで、全てを部分的にではあれ統合したが）現状に於ける我々を、唯一の同盟の正当的継承部分として主体的に確認したうえで、自己を同盟内分派として規定する。この規定のうえで、同盟内党内闘争を組織し、各グループ・個人を我々に統合し、今日一定終了したいわゆる左派・反臨総派グループの単一統合を基軸に、右派・臨総派残党フラクに対しても、統合を目途とした分派闘争を展開するし、それは他方で、臨総派　分派内党内闘争の中で登場してくるであろう、真のプロ独―革命戦争派、プロレタリア革命派との同志的結合でもある。

我々はこの事を確認する事に於いて安易な「新党結成」傾向や地理的・人間結合での「野合フラク」傾向、あるいは、単なる思想上の一致でのサロン的「会議フラク」傾向、そして一人一党的純粋イデオロギー主義、戦闘団主義的「個人運動」傾向を明確に批判、粉砕して行くのである。我々の一致は、綱領的、路線的、運動的、そして組織的一致であり、それ以外ではなく、そうであるからこそ、自己の一切に自分自身の責任を取りうるのである。

我々は、この党内闘争の軸に同盟二回総会での勝利を位置づけ、我々の組織的闘争の中に、一方での、この同盟内党内闘争―分派闘争を位置づけ、そこでの同盟系全同志との同志的闘争と団結、再結合を追求するが故に、一方でサロン的、おしゃべり的、党内闘争を拒否する事を前提に、我々の組織の重要な環に、いや、我々それ自身に、同盟第二回総会へ向けた闘いの意義と、その組織的実体を二回OCとして結成したのである。

我々のこの二回OCこそ、同盟内党内闘争の目に見える戦場であり、団結の場である。総会を開催する事、その事自身が将に野合と調停のうえでの開催でなく、党内闘争の頂点であり、それを開催するその組織化こそ、将に党内闘争の現実でなければならない。

我々は、我々のこの方向を、一方で、生きた階級闘争地平の中で、我々の党内―分派闘争を、将に生きた教訓として体現させるために可能な限り公然化しつつ闘う事、自己の階級闘争、革命運動の組織実践の中で、その党内闘争の主体たりうべき事、この事を確認し、その環を公然機関紙による公開された闘争として組織する事、陰謀とマヌーバーと調停とそして野合を徹底して排し、この闘いを闘い抜く事、そのために我々は、この我々の全国政治新聞の発刊の重要な環を規定している。

今日までの二年間、同盟内の全てが、たとえば右派は「赤軍」という存在を歴史から抹殺するために、あるいは中間派は、イデオロギー一致の調停主義、野合主義故右派に屈服したが故に、そして左派は自己の微力さと、闘いの中での困難さ故に、この『赤軍』という栄光ある機関紙は一部も出されなかった。右派―臨総派が執拗なまでにも、この『赤軍』再刊を拒否し続けた事は彼らの位置からして当然でもあった。そして『赤軍』の再刊はこうして唯一我々のみによって可能、現実化されたのだ。

――――――

我々は赤軍派の正負の遺産総体をひきうけて前進するし、その位置から同盟内党内闘争の結着―第二回総会の開催を勝ち取るのであり、そのためにもこの『赤軍』の再刊の一方の意義が存在するのである。この公然たる機関紙を通しての党内闘争―第二回総会の組織化を軸に、我々は公

然—非公然様々な結合のための闘いを続けるであろう。確かに合法組織、公然部分たる他の部分、特に臨総派分派残党グループ諸君との結合は、非公然・地下体制の我々としては、困難ではあるが我々はこの任務を放棄しない。また我々にとって、共産同の再建そのものもこの地平での闘いを、共産同内党内—分派闘争として展開しつつ、再建大会を勝ち取る事以上でも以下でもなく、九回大会を承認しない我々は、その事も確かに大きな位置を有しつつも、しかしなによりも、七回大会路線、そして九回大会を巡る闘いの中で提起した我々の地平の継承の綱領的・路線的一致での結合・再建以外ではないであろう。我々にとって共産同再建は、それ以上の意義を持たない。

我々は、二回総会でも真の党的再建を勝ち取るであろう。綱領・規約そして政治報告および人事をも含め、最后の結論はそこで採択・決定されるであろう。そのための闘いこそ、二回総会を巡る党内闘争—分派闘争であり、その実体こそ組織委員会での闘いである。

我々は、新党主義・フラク主義・イデオロギー主義・個人主義を排して今ここに存在しており、そして、我々の二回総会組織委員会の存在があるのである。

同志、兄弟達！

プロ独—革命戦争に勝利する、真の赤軍を建設せよ！

最后に、この我々の同盟内—党内—分派闘争、特に臨総派分派との党内—分派闘争を理解してもらう意味で、我々が、臨総派第二回臨総（臨時総会）に提出した党内闘争に関する文章を、資料として掲げておきたい。

〈資料〉

建党活動の敗北＝総括～我々の道

1. 我々は臨総路線の敗北の確認から以下の方向を導き出した。①権力闘争 ②革命家の組織 ③政治闘争の三点である。①権力闘争の内実を巡る闘いとしてこの間の総括論争～党内闘争を引きつけ、②革命家の組織を建設する事としてその具体化を計り、③政治闘争へとその組織運動を「労働闘争を引きあげる」指導内容として一切の政治路線を打ち出す事、この事が一切の闘いの決着でなければならない。その事は不可避に「党の革命」を要求するし、この党建設の闘いそのものが同時一体のものとしての党内—（分派）—党派闘争・同盟再建を内包する事に於いて、それは、すなわち一般的な組織改編でもなければ或いは破産—解体を宣告された、いわゆる臨総体制の延長上に夢想されるものでもない。この事を確認せず、従って自己の同盟内に於ける闘い（＝党内闘争の敗北～それさえ組織化できなかったところの運動主体）の敗北的総括と、そのものの占める将に路線としての敗北～臨総内に於ける自己敗北、それらを徹底して切開する事を拒否し、官僚主義と陰謀政治による組織維持（自フラク防衛）に走るいわゆる総括＝路線の検証を清算する、組織手直し一般の「新たな清算主義」を、我々は断固として粉砕せねばならない。連赤総括清算の上でのその延長としてのこの「第二の清算」はそれ故、二重のもっとも反動化した内容として存在する事を我々は確認しておこう。

2. この党建設を巡る闘いはいかに発展されねばならないか。

(1)臨総の破産・解体の根拠を各級機関・各地区運動それ自身の解体—混乱にひきつけ、それぞれの党建設～革命運動の敗北として切開する事。②それぞれの破産の止揚＝総括を政治路線—路線問題にひきつけ、論争～党内闘争を路線＝組織問題として確立する事。③この闘いの中で獲得された政治路線のもとで、すぐさま新たな政治組織へと同盟を改組＝革命する事。この三点の方向は従って当然にも、①同盟赤軍派第二回総会を頂点とする党内—路線闘争として確立されるのであり、それはこの党内闘争の機関として確立される。いわゆる過渡的な指導機関そのものの内実が二回総会組織委員会（二回OC）となる事を意味している。二回総会こそ、臨総内党内闘争と、同盟赤軍派系諸グループとの分派闘争（当然それ自身相互の分派—党内闘争も含め）それら総体が、将に党建設をめぐる一体のものとして闘われるべきであるし、そこにこそ臨総を超えた同盟内党内—分派闘争の革命的展開としての存在位置があるのである。党内—分派闘争～同盟再建～党建設の同時一体的遂行こそ、今日の我々に課せられた急務であり、それ以外の我々の道はない。また、それはもとより自己の組織的—革命運動の実践＝日本に於ける政治闘争—権力闘争～プロ独の闘いを抜きには存在し得ない。我々の第一の獲得すべき目標は、この二回OCを建設する事での党内—分派闘争の遂行・二回総会を結節点とする同盟赤軍派の再建→日本における革命党建設であり、その事を軸にしての全ゆる運動・党派総体の吸引・指導・統合である。決してその逆の総括を軸としてそこでの集約を党建設へ向けるという、自然発生的、組織再建ではなく、党建設～政治路線の確立＝実践からそれへの吸引としての各総括の徹底的な展開である。

我々の目標は、二回総会を闘い取る事、それへ向けて二回OCを組織する事、この事である。

3. 一切の大衆的運動上の組織は改組されねばならない。破産—解体—敗北を宣告された、各級機関—各地区組織—そして将に大衆運動の自然発生性に拝跪し、解消された個々の大衆運動の上での組織体は今日決して固執されてはならない。ましてや政治路線的一致のない、サークル的組織、その政治技術的野合フラクは徹底して解体されねばならない。臨総の痛苦の敗北～その克服の闘い～自己解体から建党の闘いから逃亡し、その闘いの今日的成果を清算する一切の「新たな清算主義者」を粉砕せねばならない。党建設—革命運動での敗北の克服を我々は決して「臨総体制の維持」という自己防衛本能一般あるいは、自己の共産主義運動への曖昧性その躊躇の中での「総括を！」という一般的言葉で語るべきでない。党内闘争の真の展開は「総括一般」で闘われるべきでない事は衆知の事実であり、自己の政治路線の中から逆に総括を確立するのであり、それこそ党内闘争である。「総括一般」でのそれは、表面的な「党内闘争」として、将に論争一般でしかなく、単なる「おしゃべり」の闘いへと自己を腐敗させるであろうし、その結論は、結局路線的一致のない「野合フラク」としてしか表現されないであろう。そのフラクはいかに大衆運動の中で献身性、誠実性を有していたとしても、それ以上ではなく、大衆運動の指導一般を巡る組織的手直しに終わるであろう。しかもその内実は大衆運動—戦術の地平での問題として、単なるサークル的共同性でしかないが故に、不断の内部動揺を生むであろうし、政治路線の欠落の結果 現象として不可避の「囲い込み」「ハッタリ」政治へと堕落し、その政治は政治技術でしかなく、内部での日常的不満・不信を生むし、また同時の不断のハッタリ＝政治技術＝陰謀政治でしかないであろう。

我々は決してフラク活動を今日の現状にあっては拒否しない。いやむしろ、政治路線上の一致のうえでの党内闘争を飛躍させうる建党フラクを要求するし、その実践的闘争の中で、新たな闘いは確立されるのだと確認する。しかし、その内実はフラク自身の党的主体性であり、またその中での党内闘争の政治・路線・組織を巡るものとして展開を内包するものでありその主体的自己検証こそが建党フラクを党へと飛躍させうるのである。それを拒否するブローカー政治、陰謀政治での野合フラクは、階級的犯罪性を有するであろう。

階級闘争の発展の中で、そのような「野合フラク」は解体されるであろうがしかし、党主体として自己を確認する我々は、我々の内部にその種の形態を認める事はできないしそれとの対決＝闘争を一方の党建設の闘いの主軸とせねばならない。

我々は、「臨総を守れ！」のスローガンの下での「野合フラク」ではなく、「党建設を闘え！」の「建党フラク」を勝ち取らねばならないのである。

今は、人的・地理的共同性を拒否して、路線的一致の検証の上での共同性をこそ、いかに少数であろうとも確立すべきなのである。

（解説）

臨総派分派による第二回臨時総会の二日目に、この文章は他の諸文書(1)臨総路線総括(2)赤軍派—連合赤軍総括(3)戦略＝革命論確立の方法論的立場(4)綱領草案①資本主義と階級闘争②過渡期世界論③党建設(5)規約草案＝党の任務(6)当面の組織戦術(7)戦略スローガン（略）と共に提出されたものである。

我々はこれらの諸文書を、すでに戦闘＝戦時下に突入しつつも、この二ケ月間可能な限りの検討を加えその限界誤謬を総括止揚してきたのであり、そして、今後もその闘いを続ける。それらの我々の理論面での成果もかならず他の爆管と共に、全同志の前に届けられよう。

（9頁より）

戦闘の開始の中で、我々自身が生き続ける事自体が困難な中にあっても、しかし我々は確実に我々自身の勝ち得たものをたとえ言葉は未熟であっても諸君のもとに可能な限り届け続けたいと思う。

我々はこの全国政治新聞の定期刊行化に今全力を注いでいる。全ての同志兄弟達の全ゆる支援、援助、カンパをここでお願いしておきたい。そしてなによりの我々への支援は、全ての同志、兄弟達が武器を組織をそして闘いを続けられる事であり、赤軍をプロレタリア統一革命軍として共に建設する事であり、我々と共に世界革命戦争の戦線に出陣してもらう事だと考えている。この我々の機関紙がその闘いに多少なりとも助力できればこの機関紙の目的は、半ば達せられると言える。

獄中の我が赤軍兵士の兄弟達にも当面はこの公然機関紙を通じての相互結合—相互止揚がその環となるだろう。我々の非力さ故、公然たる獄中同志との結合ができぬ今、獄中諸同志の批判を覚悟のうえでこのように呼びかけておきたい。

尚、本号に準備されていた諸論文を始め、我々がもっとも大衆的に明らかにせねばならない種々の総括、そして綱領文章は、本号の編集時点での中枢体制の権力との攻防の中での再編の中で、本号に掲載する事ができなかった。早急に公表するつもりである。それらは以下各号に掲載される。

「革命戦争の戦略問題」

「世界革命戦争論」

「全国政治闘争と権力問題」

「70年代中期階級情勢」

「連合赤軍の敗北—党建設へ向けて」

「同盟の綱領確立への闘い—その総括」

「戦略スローガンとその解説」

「綱領草案論争集」

「民主主義派の止揚克服のために」

および

「連赤除名、議長解任問題について」

「革命軍＝赤軍建設アッピール」

「地下戦士よりの連帯アッピール」

またすでに本政治新聞とあわせて、出版作業として「赤軍機関紙総集号」『同盟重要論文集』『獄中論争重要論文集』のそれぞれの編集発刊を準備している。

同志諸君に我が赤軍派日本委員会の政治的立場をより理解してもらうために、『赤軍機関誌総集号（革戦委編集）』および我々の第一の指導者たる同盟議長塩見同志の『塩見孝也論叢』の各号をあわせて閲読していただきたい。

我々は71年に確認したように、まだ戦闘団のひとまわりかふたまわり大きなものにすぎない。しかしなによりも革命戦争の戦場の中で自己の党建設を勝ち取る革命組織＝革命軍である事だけは断言しうるのである。我々が存在する事自体が敵にとっては敗北を意味するそのような存在たる事を確認している。同志兄弟達の真の支援と結合をもう一度要請しておきたい。

人共産同赤軍派日本委・中央宣伝局機関紙部〉